き　ら　り

令和４年度（第１３集）

～実践と研究のあゆみ～

研 究 主 題

肢体不自由及び病弱教育における

主体的な児童生徒を育む授業づくり

高等部3年2組「チュウモン　ノ　オーイリョウリテン・リローデット」

秋田県立秋田きらり支援学校

巻頭言

昨年度までの２年間、『「児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して』の研究主題で、保護者や社会のニーズを反映した教育課程改善と授業実践に結び付くことを目的として全校研究を行ってきました。その間、コロナ禍で学習活動が制限される中、ICT 活用は飛躍的に進歩し、学習の在り方が大きく変容しました。

一方で、本校は教師数が多いため、一部の優れた教師の授業改善だけではなく、全ての教師の指導力の向上、教師集団全体の指導力の底上げが課題となっています。また、全校態勢の研究は、個々の教師のニーズが反映しづらく、一部の教師がリードするようになりがちで、その他の教員の研究への参画意識が高まりにくい側面もありました。

そこで、今年度は、コロナ禍で先が見えにくい状況でもあるため、１年間の研究で、「個々の教師」に焦点を当て、①教師個々の課題とニーズを調査、分類、集約して研究を進める方法としました。また、②「一人一授業」として、指導助言等を行うベテラン教師を除く、臨時講師を含めた全教師の研究授業を実施しました。

①については、課題ごと８つのグループとし、それぞれに研究部員が入って、研究グループによる研究推進を行いました。グループ研究会は定期的に開催し、メンバーの研究授業の略案をもとに協議するなどして研究を進めました。更に、年間３回の全校研究会や研究便りにより各グループ研究を全教員で情報共有しました。

②については、６月から１月の間に８１人、８１回の研究授業を実施することができました。同じ研究グループのメンバーと数名の指導助言教員が必ず参観することとし、事後の授業研究会の実施が難しい場合はあらかじめ決めた参観・研究の観点について付箋紙に記入して協議に代えるなどの方法を取りました。

研究成果としては、ねらいであった、全教師の授業改善についての意識向上が挙げられます。全ての教師の指導力向上が実際になされたかどうかを評価することは難しかったのですが、全体的な底上げには多少なりともつながったのではないかと感じます。

また、昨年度来、本校で特に積極的に取り組んでいるＩＣＴ活用についても充実が見られました。ほぼ全ての授業においてＩＣＴ活用が日常化しています。特に、アバターロボットや視線入力、トラックパッド、タッチパネルなどの活用は、肢体不自由がある本校児童生徒の学習の幅を画期的に広げていると感じます。

課題としては、ある程度予想されたことではありますが、グループ研究であるため、どうしても全校的な成果が実感できにくいことなど、これまでの全校態勢での研究に比べて違和感を感じる教師が多かったことです。

来年度は、今年度の成果と反省をもとに、従来の全校態勢で、学部横断の教育課程類型ごとの研究とする予定です。今後も、今日の本校の「不易」と「流行」を見定めながら、本校児童生徒の自立と社会参加につながる研究を進めていきたいと思います。

終わりに、本校研究をご指導いただきました先生方にお礼申し上げますとともに、日ごろ本校教育活動にご理解、ご協力をいただいている皆様方に深謝いたします。また、本研究紀要が多くの方にご高覧いただければ幸甚です。

校　長　　千　葉　雅　樹

目　次

巻 頭 言　　校 長　　千葉　雅樹

Ⅰ　全体研究の概要　・・・　1

Ⅱ　各研究グループの実践

Ａ　小学部１組　教科別の指導　・・・１２

Ｂ　小学部２・４組　教科別の指導　・・・１７

Ｃ　小学部２組　自立活動　・・・２３

Ｄ　小中学部３組　教科別の指導・自立活動　・・・２９

Ｅ　中高等部１組　教科別の指導・自立活動　・・・３４

Ｆ　中高等部２・４組　教科別の指導・自立活動　・・・３９

Ｇ　情報機器・支援機器の活用　・・・４４

Ｈ　中高等部１組　キャリア教育・各教科等を合わせた指導　・・・４８

Ⅲ　各種研究大会発表　・・・５３

・第 60 回東北地区肢体不自由教育研究大会山形大会　藤原恵理子　高澤衣久子

・第 61 回全日本特別支援教育研究連盟全国大会秋田大会　熊地　勇太

・第２回北海道東北地区病弱虚弱教育研究連盟研究協議会福島大会　佐藤　友香

・第 63 回全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会山口大会　藤原恵理子　小林佐知子

あとがき　副校長　近藤　千晴

令和４年度　研究同人

Ⅰ　全体研究の概要

１　研究主題　　肢体不自由及び病弱教育における主体的な児童生徒を育む授業づくり

２　研究主題の設定理由

（１）本校の特色

本校は、県内唯一の肢体不自由及び病弱教育の児童生徒を対象とした特別支援学校である。卒業後の進路希望は、進学や就職、福祉事業所、医療機関、在宅など様々であり、職員は児童生徒の多様な障害の種類や状態に応じた指導や支援など､細かな対応とその専門性が求められている。

（２）学校経営方針より

本校の目指す児童生徒像は「1)自ら学ぶ～主体性 2)豊かに表す～表現力 3)健やかに生きる～健康 4)手をつなぐ～連携」であり、教育方針として､「児童生徒の多様な教育的ニーズに基づき、根拠の明確な教育課程を編成し、自主性、主体性を育む教育を展開する」と掲げられている。本年度の重点として、「カリキュラムマネジメントの推進と ICT 等を活用した授業改善」「児童生徒の主体性及び社会性の伸張と生涯学習につながる資質の育成」等を掲げており、本校は児童生徒の「主体性を育むこと」を重視している。

（３）これまでの研究から

昨年度までの２か年の研究では、「何を学ぶか」「何が身についたか」に焦点を当て、目標や指導内容の設定、評価の検討を行った。その成果として、第一に各教科等の「育成を目指す資質・能力」の三つの柱に基づいた目標を年間指導計画や学習指導案に明確に示したことで、具体的な目標や指導内容の設定に繋がったこと、第二に評価基準や評価の観点を二段階で設定したり、個別の目標を評価可能な具体的な目標としたりすることで、身に付いたことを評価できることにつながった。

その一方で、より明確な評価基準が必要であるという意見や評価の客観性に難しさを感じている職員も多く、評価については今後も工夫をしていくことが課題である。また、複数の類型に関わり指導する職員が多いことから、研究の情報共有も必要であることも挙げられた。

（４）秋田きらり支援学校教育の基本から

本校では、肢体不自由・病弱教育の充実に向けて「秋田きらり支援学校教育の基本」（図１）が作成されており、教育目標と児童生徒の実態から児童生徒の「目指す姿」として児童生徒をどう育てたいかを明確にして授業実践・授業改善に取り組んでいる。

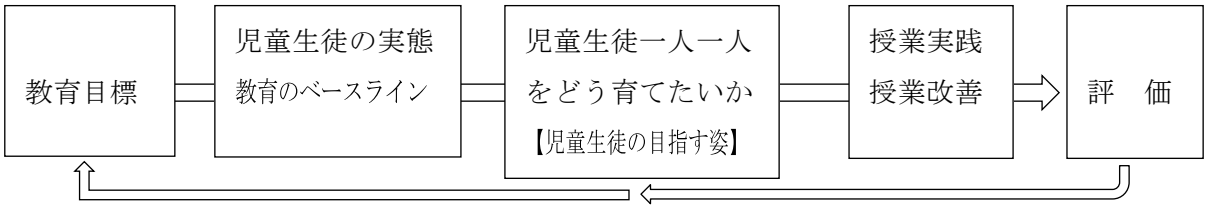
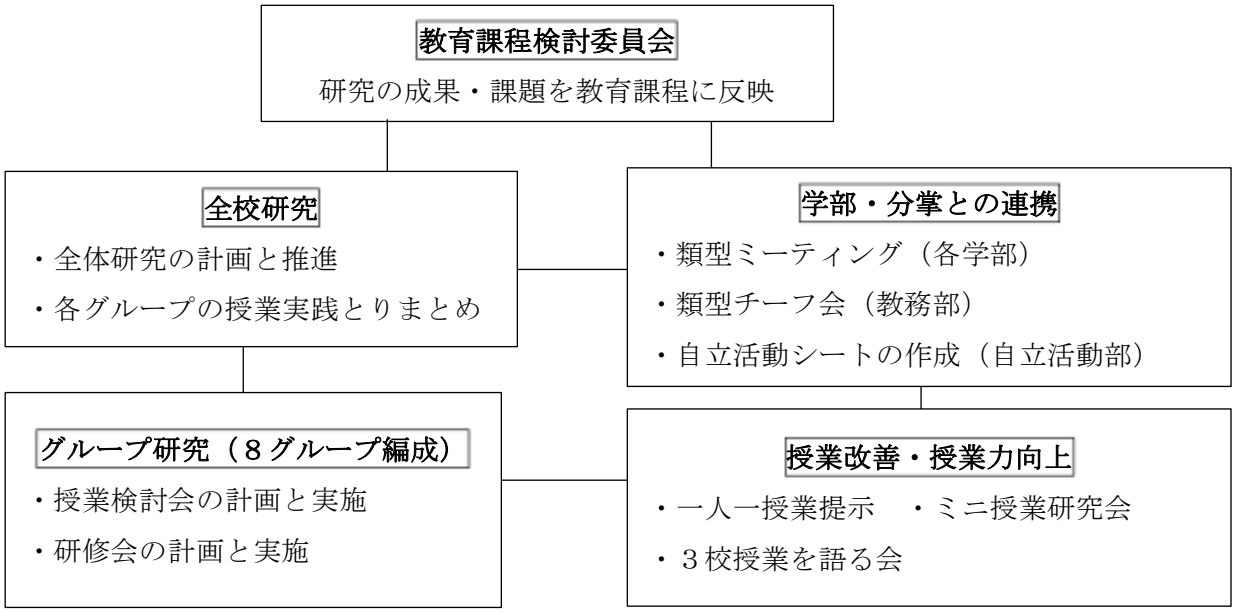


図１　秋田きらり支援学校教育の基本

３　研究の目的

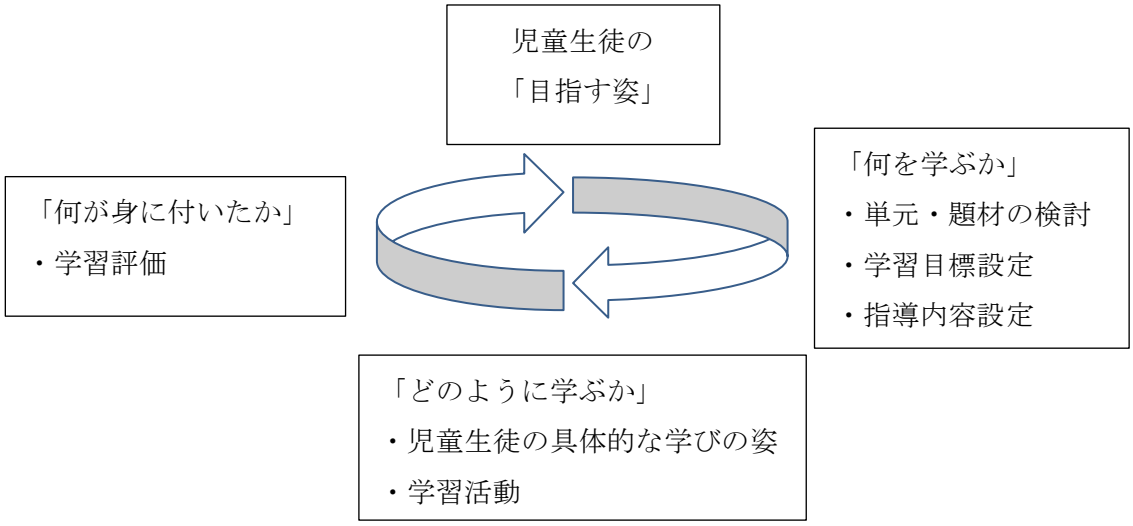
児童生徒の一人一人の「目指す姿」を基に、学習目標や指導内容の設定、題材や単元と学習評価についての検討と改善を図る授業づくりを実践する。

４　研究組織



５　研究の方法

児童生徒一人一人の「目指す姿」実現のため、次の内容と方法で取り組む。



【授業づくりのイメージ図】

（１）職員の希望を基に研究グループを編成する。

・活発な意見交換ができるように、少人数で構成する。研究部員が各グループに１名所属し、グループ内の進行を行う。

（２）授業検討会の実施

・グループ内で、一人ずつ授業検討会を実施し、児童生徒の目指す姿や主体的な姿と関連させた提示授業の本時の目標や学習活動、教師の手立て、評価基準について検討する。

（３）一人一授業の提示とミニ授業研究会の実施

・授業は教諭（一部を除く）と臨時講師が提示し、数名の教諭が参観する。

・放課後のミニ授業研究会では、学習活動や教師の手立て、評価について協議する。

６　研究計画

期日	項目	内容
４／２７（水）	全校研究会Ⅰ	・今年度の研究と計画 ・学級の教師間での相談と希望用紙への記入
５／３０（月）	グループ研①	・６月の授業検討会
６／２１（火）	グループ研②	・７月の授業検討会
７／１４（木）	グループ研③	・８月の授業検討会
８／２６（金）	グループ研④	・９月の授業検討会
９／２６（月）	グループ研⑤	・１０月の授業検討会
１０／１２（水）	全校研究会Ⅱ	・研究の中間報告
１０／１３（木）	グループ研⑥	・１１月の授業検討会
１１／２２（火）	グループ研⑦	・１２月の授業検討会
１２／１９（月）	グループ研⑧	・１月の授業検討会
２／　７（火）	グループ研⑨	・グループのまとめ
２／２８（火）	全校研究会Ⅲ	・今年度のまとめと次年度の研究

７　研究の経過とまとめ

（１）研究グループの編成

本校職員が所属している学部や担当授業から、実践して深めたいテーマや授業のアンケートをもとに、以下の８つのグループを編成し、10～12 人程度で構成した。

Ａ　小学部１組　教科別の指導　　Ｂ　小学部２組　教科別の指導

Ｃ　小学部２組　自立活動　　Ｄ　小中学部３組

Ｅ　中高等部１組　教科別の指導　Ｆ　中高等部２組　教科別の指導・自立活動

Ｇ　情報機器・支援機器の活用　　Ｈ　中高等部　キャリア教育・各教科等を合わせた指導

なお、１組は知的障害代替の教育課程、２組は自立活動を主とする教育課程、３組は準ずる教育課程を示している。

（２）授業検討会

毎月のグループ研究会にて提示をする１つか２つの授業についての検討会を実施した。始めに授業者による説明の後、悩んでいることや授業をさらによくするためのアイディアを出し合った。

少人数のグループを構成することで、活発な意見交換ができ、学習活動や手立て、教材・教具等、児童生徒が主体的に学習に取り組むための様々なアイディアが出され、本時の目標やめあての設定の具体化につながった。また、他の職員の考えや授業について知る機会にもなり、それぞれの実践の広がりにもなった。

職員へのアンケートによる授業検討会の満足度（表１）は、「とても役立った」が 34 人(32.2%)、「役立った」が 53 人(64.4%)、「あまり役立たなかった」が３人(3.3%)であった。約 97%の職員が「役立った」と回答した。特に役立った内容（表２）としては、「学習活動」57 人(63.3%)、「目標やめあての設定」52 人(57.8%)、「手立て」44 人(48.9%)が高い割合を示した。また、グループ毎の役立った内容として、割合の高いものを示したのが表３である。グループによって、「目指す姿の共有や見直し」「単元や題材の設定」が高い割合を示している場合もあった。授業者にとって、「学習活動」や「手立て」がより明確になったこと、ねらいの妥当性を検討することができたこと、準備した教材を改良するきっかけとなったこと等の肯定的な意見が多かった。

しかし、１回のグループ研で２つの授業検討会を実施した場合もあり、十分な協議時間の確保ができず、もう少し時間が欲しかったという意見もあった。また、検討会での話題が多岐に渡り、一貫性を持った協議になりにくく、全校やグループ内での主体的な姿を育てるために大切なことを積み重ねたり共有したりすることが難しいという課題もあった。

表１　授業検討会の満足度(回答数 90)

とても役立った	34(人)	37.8(%)
役立った	53	58.9
あまり役立たなかった	3	3.3

表２　授業検討会で役立った内容(回答数 90)(複数選択)

学習活動	57(人)	63.3(%)
目標やめあての設定	52	57.8
手立て	44	48.9
教材・教具	27	30.0
目指す姿の共有と見直し	25	27.8

表３　各グループの授業検討会での役立った内容（複数回答）

グループ	50%以上を占めた内容			具体的内容（抜粋）
A	目標やめあての設定	5(人)	66.7(%)	・めあてに対してのまとめをしっかりすることで、授業を通しての柱ができることが改めて分かった。
(回答数 9)	学習活動	6	55.6	・実態や目指す姿の共有により、本時の目標とめあてについて再検討する視点を得たこと。
	目指す姿の共有や見直し	6	55.6	
B	学習活動	7	63.6	・児童生徒の主体的な姿を引き出すための学習活動や手立て
(回答数 11)	教材・教具	6	54.5	・教材についてのアドバイスや意見をたくさんの先生から頂き、よりよいものを作って授業に臨むことができた。
C	目標やめあての設定	8	66.7	・略案で、めあてと学習内容に迷いがあったが、先生達のアドバイスでイメージしたことがより明確になった。
(回答数 12)	学習活動	8	66.7	・活動の中でねらう身体の動きと、その学習活動と手立てについて具体的に考えられた。
D	学習活動	5	62.5	・学習活動を精選できた。
(回答数 8)	手立て	4	50.0	・先生達のアドバイスで客観的な視点でより実態にあった授業プランに切り替えることができた。
E	目標やめあての設定	7	77.8	・めあてや学習活動の妥当性を確認できた。
(回答数 9)	学習活動	7	77.8	・複数の目で見てもらえたことで、実態とめあての整合性や学習活動の有効性を見直すよい機会となった。
	単元や題材の設定	5	55.6	
F	学習活動	7	70.0	・自身がやりたいことは自立活動になっているか、手立てはふさわしいかという迷いが解消された。
(回答数 10)	手立て	6	60.0	・目標の妥当性や学習活動に合う教材の意見をもらえた。
	目標やめあての設定	5	50.0	
G	学習活動	4	57.1	・自分だけの考えでは曖昧だったが、意見を得て、間違っていない、検討が必要とか、考えが整理できた。
(回答数 7)				
H	目標やめあての設定	8	72.7	・めあての設定について具体的に意見をもらえてよかった。
(回答数 11)	手立て	6	54.5	・他の指導形態との関連性を深めるための手立てについてアイディアをもらえたこと
参観者	学習活動	10	76.9	
(回答数 13)	手立て	9	69.2	
	目標やめあての設定	9	69.2	

（３）一人一授業の提示と参観

本校職員（教諭、臨時講師）を対象として一人一授業を提示してもらうこととした。なお、授業を参観し、助言する職員として、副校長・教頭・教育専門監・各学部主事・ＩＣＴ活用リーダー・進路指導主事・地域支援部主任・保健主事・研究主任など 20 名を授業参観者として、一つの授業に２～３名を割り振り、参観するようにした。

授業は６月から開始し、１月末まで合計 81 授業の提示と参観を行った。(授業一覧は各グループの実践を参照)。コロナ禍でもあること、授業参観ができない場合もあることにも配慮して、授業を動画で撮影し、後日見ることができるようにした。授業を行う職員にとって、自身が深めていきたい授業を提示するので、自身が悩んでいることや不安に思っていること、深めていきたいことなど考える機会となった。

授業者が提示授業で主体的な児童生徒を育てるために大切にしたことや工夫したことを集計したものが表４である。特に割合が高かったのは、「学習活動」で 57 人(74.0%)、次に「手立て」で 47 人(61.0%)であった。一方で「まとめや振り返り」16 人(20.8%)、「評価」14 人(18.2%)と低い割合であった。

（４）ミニ授業研究会

提示授業後に、授業者と参観者、研究部員の５～６名が集まり、１回 20 分程度、計 81 回行った。職員一人一人に応じた助言ができ、そのことで自身の授業を見直し、授業改善につながった。一方で、たくさんの人数でじっくりと授業を検討したり協議したりしたかった、もっとたくさんの人に参観して意見が欲しかったと思う職員もおり、協議の持ち方や参観体制の計画など課題があった。

職員へのミニ授業研究会の満足度（表５）について、「とても役立った」が 49 人(54.4%)、「役立った」が 33 人(36.7%)、「あまり役立たなかった」が１人(1.1%)であった。約 91%の職員が「役立った」と回答した。なお、本アンケートの実施が授業提示前の職員もおり、「無回答」が ７ 人(7.8%)という結果も表れた。また、表６に示したミニ授業研究会で役立った内容としては、「学習活動」が 52 人(57.8%)、「手立て」が 46 人(51.1%)で２つが 50%を超える割合を示した。

表４ 授業で大切にしたこと、工夫したこと(回答数 77)(複数選択)

学習活動	57(人)	74.0(%)
手立て	47	61.0
目標やめあての設定	38	49.4
教材・教具	37	48.1
目指す姿の共有や見直し	22	28.6
単元や題材の設定	21	27.3
まとめや振り返り	16	20.8
評価	14	18.2
その他	3	3.9
無回答	3	3.9

表５ ミニ授業研究会の満足度(回答数 90)

とても役立った	49(人)	54.4(%)
役立った	33	36.7
あまり役立たなかった	1	1.1
無回答	7	7.8

表６ ミニ授業研究会で役立った内容(回答数 90)(複数選択)

学習活動	52(人)	57.8(%)
手立て	46	51.1
目標やめあての設定	36	40.0
教材・教具	34	37.8
まとめや振り返り	31	34.4

表７　各グループのミニ授業研究会での役立った内容（複数回答）

グループ	上位を占めた内容			具体的内容（抜粋）
A	学習活動	7(人)	77.8(%)	・教科学習での指導すべきことを具体的に知ることができた。
(回答数9)	手立て	7	77.8	・教科指導の中に自立活動の視点をもつ大切さについて改めて分かった。
	目指す姿の共有や見直し	5	55.6	
	単元や題材の設定	5	55.6	・他学部や教科の専門的な視点からの助言がもらえた。
B	学習活動	6	54.5	・学習の終わりが分かるとよい
(回答数11)				・１時間の学習にストーリー性をもたせてもよい
C	学習活動	7	58.3	・授業での学びをどう展開して児童の学習の質を高めていくか、考える示唆をもらった。
(回答数12)				・教材提示の仕方について、関連付けるための具体案を効くことができた。
D	まとめや振り返り	6	75.0	・授業を終えて、子供と自分と向き合えるような手立て、まとめの仕方を具体的に教えてもらった。
(回答数8)	手立て	5	62.5	
	評価	4	50.0	・まとめや板書の仕方について参考になった。
E	目標やめあての設定	7	77.8	・学習活動の設定の仕方やめあてなど改めて考えることができた
(回答数9)	学習活動	5	55.6	・めあての持ち方の助言をもらい参考になった。
F	学習活動	6	60.0	・目標設定に具体的な意見をもらえた。
(回答数10)	目標やめあての設定	5	50.0	・目指す姿や目標設定、教材・教具について意見交換できた。
G	目標やめあての設定	4	57.1	・１組理科として授業の工夫の仕方や目標設定など改めて考えさせられた。
(回答数7)				
H	評価	5	45.5	・何をもって評価とするか具体的な意見をもらえた。
(回答数11)				
参観者	学習活動	11	84.6	
(回答数13)	手立て	10	76.9	
	教材・教具	9	69.2	
	目標やめあての設定	9	69.2	

また、グループ毎の役立った内容としては表 7 のとおりである。「目指す姿の共有や見直し」「まとめや振り返り」「評価」が高い割合を示しているグループもあった。

（５）その他

表８は、授業者が授業検討会や授業提示、ミニ授業研究会を通して授業改善・授業力向上につながったかを集計したものである。「とてもつながった」19 人(24.7%)、「つながった」52 人(67.5%)であり、約 92%の職員が、今回の実践を通して日々の授業の改善や授業力向上につながったと感じている。授業参観者で集計したものが表 9 である。「とてもつながった」3 人(23.1%)、「つながった」7 人(53.8%)であり、約 77%が授業改善や授業力向上につながったと感じた一方で、「あまりつながらなかった」3 人(23.1%)であった。理由として、「その後の授業を見ることができない（し

ない）ため、向上できたと明言できない」「何のために一授業を行うのかを全職員が十分に理解した上で取り組んでいたかというと、果たしてどうだろうかと考える。」「授業者自身がミニ授業研究会で出た話題をどれだけ自分のものにできるかが、授業力向上につながると思うので判断は難しい」であった。授業後のフォローアップを十分に行うことが必要であり、具体的な取り組みの検討が課題である。

表 10 は、「授業を参観して主体的な児童生徒を育てるために今後どんなことが大切だと考えるか」について、参観者側からの自由記述を集計したものである。記述部を 15 ラベルに分けて、「目指す姿の共有や見直し」「学習活動や環境設定」「目標やめあての設定」「評価」「その他」の順に５つのカテゴリーに整理した。「目指す姿の共有や見直し」が多く、児童生徒の目指す姿を教師間で共有し授業づくりを行うことと、目指す姿を基にすることで児童生徒にとって必然性のある学習や教師の意図のある授業や指導につながっていくことが重要であることを指摘している。

表８　授業改善・授業力向上につながったか(授業者)（回答数 77）

とてもつながった	19(人)	24.7(%)
つながった	52	67.5
あまりつながらなかった	2	2.6
無回答	4	5.2

表９授業改善・授業力向上につながったか（参観者）（回答数 13）

とてもつながった	3(人)	23.1(%)
つながった	7	53.8
あまりつながらなかった	3	23.1

表 10　主体的な児童生徒を育てるために今後どんなことが大切だと考えるか（自由記述）（総ラベル 15）

カテゴリー	具体的内容（抜粋）
目指す姿の共有や見直し(5)	・目標や育てたい姿を教師間で共有し、複数で授業づくりをすること。 ・担任間での児童生徒の実態や目指す姿の共有ができているかかが大事である。そこが押さえられていないと目標も定まらず、授業もぶれてしまう。 ・児童生徒の目指す姿を念頭に置いて日々過ごしているか、チームでどんな形で共有しているかキーになるのではないか。 ・将来の生活を見据えて、目指す姿や目標を設定すること。学部卒業時にどんな姿になってほしいかを意識して指導すること。そのことにより、必然性のある指導になり、児童生徒がなぜ今これを学ぶかが明確になると思います。 ・キャリア教育に関して、個々の児童生徒の将来像を見据えた指導が大切だと考える。
学習活動や環境設定(4)	・自分で取り組む環境設定と場面設定、学習活動の工夫と教師の手立て ・意欲のもてる活動内容を確保、待つ時間の確保、思考を保証すること。 ・児童生徒にとって最適な課題であること。 ・学習内容が分かり、おもしろそう、やってみたいと思える導入や、少しでも自ら取り組む姿を引き出す指導の工夫などを、日常的に意識していくことが大切だと思う。
目標やめあての設定(2)	・めあてや学習課題を児童生徒に分かりやすく伝えること。 ・集団での学習でも、やる内容だけでなく、個々のねらいも事前に共有する必要がある。
評価(2)	・児童生徒の一人一人の内面を逃さず捉え、柔軟に指導・支援していくこと、それを複数の目で評価、改善、実践を積み重ねていくことが必要だと思う。 ・目標設定と評価、特に評価のあり方
その他(2)	・児童生徒自身ができたこと、がんばったことを実感できる振り返りやまとめ ・授業者間の話し合い

（６）考察

今年度は、主体的な児童生徒を育むことをテーマに、校内研究に職員全員が関わることができるように、「どのように学ぶのか」について一人一授業提示を行い、実践してきた。「主体的・対話的で深い学び」の３つの視点で成果と課題を述べていく。

１）成果

①主体的な学び

授業者が「児童生徒の興味・関心のあるところから学習を行うこと」を意識することで、児童生徒がやってみようとする意欲や、夢中になって時間いっぱい学習に集中して取り組むことにつながっていた。また、「ストーリー性がある学習展開を設定すること」で、児童生徒が次に行う活動や学習の終わりを理解するなど、学習への見通しをもって臨んでいた。さらに「導入で身近な話題から本時のめあてにつなげていくこと」で、児童生徒が自分事として捉え、めあてを自ら考えることにつながったりその後の学習への動機付けになったりしたことが成果としてあげられる。

②対話的な学び

「友達と一緒に役割に取り組み、関わりながら相手の考えを知ることや自己の考えをひろげることにつながった」「友達の活躍場面を設けることで自分も頑張ろうとする姿が見られた」「教師とのやりとりの中で自分の思いを伝えようとした」「他の人の意見を聞くことでより考えを広げ深めることにつながった」という実践報告もあり、この場の設定が児童生徒の考えを広げることにつながっていた。

③深い学び

提示授業でのＢグループの国語では、教師の意図が分かりスイッチを押して役割を果たそうとする姿や、Ｄ グループの自立活動では、今後の学習の計画を自分たちで立てることにより見通しをもって、課題に対して自分たちで解決しようとするようになり、その姿が他の場面でも見られるようになったなど、成果としてあげられる。

２）課題

①主体的な学び

「残りの時間が少なくなり、まとめを教師の言葉ですることが多い」や「活動時間が長くなってしまい、振り返る時間が十分に取れなかった」などの反省もあった。児童生徒の考えを生かしてまとめていくことやその時間の学びを振り返ることが十分に設定できていない場合もあり、児童生徒が自己の学習を振り返って次につなげていくためにも今後はまとめや振り返りをどのように充実させていくのかが課題である。

②対話的な学び

「友達と相談する場面を設けたが、自分の意見を話すことができなかった」や「友達と協力する場を設定したものの、声を掛けて一緒に取り組むことができなかった」などの反省もあり、どのようにして学び合いの場を設定し、どのような手立てを講じていくのか今後の課題でもある。

③深い学び

児童生徒にとって少し難しい課題に取り組むというよりも児童生徒ができる学習活動に終始してしまう場合や、学習活動の時間が多くなり、まとめや振り返りに十分な時間がとれなかったなど、目標の達成状況を評価することが難しく、「何を学ぶのか（学んだのか)」「この学習が何に

つながっていくのか」が曖昧な授業になることも散見された。授業参観者からの意見からは、「単元や題材の目標設定を十分に検討する必要がある」「まとめと振り返りによる単元や１時間の授業の目標の把握が必要である」とあるように、単元や１時間のねらいを達成した子供の姿を具体化し、めあてを示すなどの授業を実践していくことが大切であると考える。児童生徒が、今日の学びを実感することや学んだことを日常生活や他の場面へ生かしていくこと等、児童生徒の「深い学び」の姿のイメージの具体化と共有化を進めていくことが課題である。

（７）まとめ

約 100 名の職員がいる本校では、8 つのグループからの情報を共有することは十分だったとは言えないものの、児童生徒ができた、もっとやりたいと思う主体的な姿を目指して一人一人が授業づくりに向き合い、取り組んできた一年間であった。

「主体的･対話的で深い学び」の実現に向けて、これからの肢体不自由教育において菅野(2022)は、「障害による学習上又は生活上の困難さによる手立てや配慮事項、指導方法だけでなく、（中略）単元や題材など内容や時間のまとまりをどのようにデザインしたのかを明確にしていくことが大切」としている。今年度の実践の成果と課題から、次年度は、学部縦割りの類型を基にして、児童生徒の目指す姿を職員間で共有し、深い学びの視点に重点を置いた年間指導計画や単元構成の検討を行うことで、なぜ、何のために学習するのかという指導の意図を明確にした授業づくりにつなげていきたい。そして、児童生徒自身が物事に対して積極的に、意欲的に、粘り強く、取り組む姿、主体的な姿をたくさん引き出すことができるように、日々の授業を大事にして学習活動の展開を工夫したり、教師の手立てをより明確にしたりして、実践を積み重ねていきたい。

【参考文献・資料】

秋田県立秋田きらり支援学校研究紀要　第 6～12 集
肢体不自由教育実践授業力向上シリーズ 9「新しい肢体不自由教育への希求」　ジアース教育新社
肢体不自由教育実践授業力向上シリーズ 10「学びの連続性を目指す授業づくり」ジアース教育新社
主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について　文部科学省国立教育政策研究所
特別支援学校学習指導要領　学習指導要領解説　総則編　文部科学省

Ⅱ　各研究グループの実践

Ａ　小学部１組　教科別の指導

Ｂ　小学部２・４組　教科別の指導

Ｃ　小学部２組　自立活動

Ｄ　小中学部３組　教科別の指導・自立活動

Ｅ　中高等部１組　教科別の指導・自立活動

Ｆ　中高等部２・４組　教科別の指導・自立活動

Ｇ　情報機器・支援機器の活用

Ｈ　中高等部１組　キャリア教育・各教科等を合わせた指導

Ａグループ（小学部１組　教科別の指導）

１　研究計画

（１）授業検討会

月日	研究・研修	内　容
5/30(月)	グループ研究会①	今年度のグループの研究について[説明] 授業検討会（小学部４年１組算数科）
6/21(火)	〃　②	授業検討会（小学部３年１組算数科）
7/11(月)	〃　③	授業検討会（小学部１年１組国語科：初任研授業） 類型チーフ、学年主任、研究グループチーフのみ
8/ 3(水)	〃　④	提示授業視聴（小学部１年１組国語科：初任研授業）
8/ 8(月)	〃　⑤	提示授業視聴（小学部４年１組算数科、小学部３年１組算数科）
8/26(金)	〃　⑥	授業検討会（小学部５年１組国語科）
9/14(水)	〃　⑦	授業検討会（小学部１年１組国語科）
9/26(月)	〃　⑧	授業検討会（小学部２年１組生活科、小学部１年１組算数科）
11/ 1(火)	〃　⑨	授業検討会（小学部６年１組国語科、小学部１組体育科）
12/ 6(火)	〃　⑩	授業検討会（小学部１組体育科）
2/ 7(火)	〃　⑪	Ａグループの研究紀要と全校研究会の発表内容について

（２）提示授業

月日	内　容
6/17(金)	小学部４年１組　算数科「かぞえよう」１～３までの数
7/13(水)	小学部１年１組　国語科「ままごとことばあそび」
7/15(金)	小学部３年１組　算数科「かぞえよう」１０までの数
9/ 2(金)	小学部５年１組　国語科「ともだちのなまえ」
9/22(木)	小学部１年１組　国語科「おなじかたちはどれかな　おなじいろはどれかな」
10/ 4(火)	小学部２年１組　生活科「ゴムであそぼう」
10/ 6(木)	小学部１年１組　算数科「どちらが多いでしょう」１～５までの数
11/ 9(水)	小学部６年１組　国語科　つたえたいことを理由をあげて話そう 「わたしたちの学校じまん」
12/ 5(月)	小学部１組　体育科「チャレンジサーキットをしよう！①」
12/19(月)	小学部１組　体育科「チャレンジサーキットをしよう！②」

提示授業後に、授業者と参観者、担当研究部員の５～６名でミニ授業研究会を行った。①授業者の反省②参観者から③今後の改善点の流れで 20 分程度実施した。

２　授業実践

（　省略　）

３　実践を終えて

実践した授業は、個別・集団と学習形態は異なるが、全て教科別の指導である。１組児童の「主体的に学ぶ姿」を共有し、さらに類型ミーティングを経て、児童の実態や目指す姿をグループ内で確認したことで、授業検討会での質疑応答や意見交換が活発になった。本時の目標や評価の再考、児童が分かる「めあて」の修正、児童の動機付けを大切にした単元構成の見直しなどを通して、児童がやるべきことが分かり、やろう（やってみよう）とする気持ちをもって学習に臨んだり、自ら考えて行動したりする主体的な学びにつながった。

ミニ授業研究会では、児童の疑問や気付きを大切にして、児童自身の考えを広げたり、深めたりする場面をどのように組み立てるかについて話題になった。教師が一方的に教えるのではなく、児童が児童同士、あるいは教師と、あるいは資料や教材などに触れながら、対話を通して学ぶ姿を引き出せるよう、単元や題材の内容を構成していく視点が得られた。さらに、教科の目標を達成するために、肢体不自由児の困難さを補う手立てとして自立活動の視点を常に意識し、指導の中に取り入れていく大切さにも改めて気付かされた。

本グループの教師からは、「他学部の教師や教科の専門的な視点から得られたことが有意義だった。」「個別指導の授業提示をしたが、日頃から集団で指導する状況を意識的に設定したいと考えるようになった。」「教科から学校生活全体への指導のつながりについてヒントを得た。実践したい。」「ＩＣＴを効果的に活用した授業の進め方について意識するようになった。」「自分の立ち振る舞いや言葉遣い等改めて見直す機会になった。」などが、授業改善や授業力向上につながった内容として挙げられ、教師一人一人の気付きや意識の変化につながった実践であった。「授業後の協議を複数で行えたらよかった」などの前向きな意見も得られたため、今後も類型ミーティング等を活用しながら、複数の教師で授業を参観し、意見や考えを伝え合う機会を工夫し、主体的に学ぶ児童の育成を目指して、授業づくりを進めていきたい。

Ｂグループ（小学部２・４組　教科別の指導）

１　研究計画

（１）授業検討会

月日	研究・研修	内　容
5/30(月)	グループ研究会①	授業検討会（小学部４年国語科　小学部４年国語科）
6/21(火)	〃　②	授業検討会（小学部４年国語科　小学部６年国語科）
7/14(木)	〃　③	６月・７月の実践報告と協議
8/26(金)	〃　④	授業検討会（小学部５年算数科）
9/27(火)	〃　⑤	授業検討会（小学部１年国語科　小学部６年国語科）
10/13(木)	〃　⑥	授業検討会（小学部３年算数科　小学部６年国語科）
11/22(火)	〃　⑦	授業検討会（小学部４年国語科　小学部３年算数科）
12/19(月)	〃　⑧	授業検討会（小学部４年算数科）
2/ 7(火)	〃　⑨	グループのまとめ

（２）提示授業

月日	内　容
6/13(月)	小学部４年２Ａ組　国語科　「お話を楽しもう～三びきのやぎのがらがらどん～」
6/15(水)	小学部４年４組　国語科　「おはなしをたのしもう～うみへいくピンポンバス～」
7/12(火)	小学部４年４組　国語科　「３びきのこぶた」
7/14(木)	小学部６年２組　国語科　「読もう、聞こう、やってみよう～いもほりバス①」
9/ 6(火)	小学部５年２組　算数科　「ないことをつたえよう・５回鳴らそう／見付けよう」
10/18(火)	小学部１年２組　国語科　「ももたろう」
10/27(木)	小学部６年２組　国語科　「読もう、聞こう、やってみよう～いもほりバス②」
11/17(木)	小学部３年２組　算数科　「かくれんぼあそび」
11/24(木)	小学部６年２組　国語科　「読もう、聞こう、やってみよう～いもほりバス③」
12/12(月)	小学部４年２Ｂ組　国語科　「そらいろのたね」
12/13(火)	小学部３年２組　算数科　「おなじいろ、おなじかたち」
1/31(火)	小学部４年２Ｂ組　算数科　「おなじいろ」

提示授業後に、授業者と参観者、担当研究部員の５～６名でミニ授業研究会を行った。①授業者の反省②参観者から③今後の改善点の流れで２０分程度実施した。

２　授業実践

（省略）

３　実践を終えて

国語科では、読み聞かせ方や教材提示の仕方を工夫したことで、児童が絵本や紙芝居等に目を向けたり読み聞かせに聞き入ったりする姿につながった。また、物語を楽しみ言葉を意識しやすいよう、見立て遊びや教材、手立て等を検討し改善したことで、表情や発声等で気持ちを表す、教材・教具に自分から触れる、意欲的に役割を果たすなど、主体的な姿が見られた。ミニ授業研究会では、国語科の目標に多く見られる「気持ちを表す」について、個々のねらいを具体的に教師間で共有することの必要性が話題となった。また、集団の学習においても、より対話的な学びにつなげるために、他の児童の様子に気づき、児童同士も関わり合える配置や場面設定について改善していく必要がある。

算数科では、実態に沿った目標について教科の視点から検討し、児童の興味、関心に沿った学習活動や教材を工夫したことで、教材を見付けて手を伸ばしたり、問い掛けに応じて色を選んだりする姿につながった。ミニ授業研究会では、動機付けや意欲付けのために、ストーリー性をもたせること、終わり（できた）が分かりやすい学習内容や展開の工夫が課題としてあがった。

本グループでは、授業検討会において、教科としての題材の捉え方や目標設定、学習活動や教材の妥当性について具体的に意見交換され、授業づくりに生かすことができた。職員アンケートからは授業検討会でのアドバイスにより、迷いなく授業づくりをすることができたという意見も見られた。実践を通しての課題を踏まえ、今後も教科における学びを深められるよう、より検討を重ねていきたい。

Ｃグループ（小学部２組　自立活動）

１　研究計画

（１）授業検討会

月日	研究・研修	内　容
5/30(月)	グループ研究会①	授業検討会（小学部３年自立活動）２授業
6/21(火)	〃　②	授業検討会（小学部２年自立活動）２授業
8/26(金)	〃　③	授業検討会（小学部４年自立活動）２授業
10/ 5(水)	〃　④	授業検討会（小学部４年自立活動２名）
10/13(木)	〃　⑤	授業検討会（小学部３年自立活動）１授業 自立活動について（教育専門監より）
11/22(火)	〃　⑥	授業検討会（小学部３年自立活動　小学部２年自立活動）
12/21(水)	〃　⑦	授業検討会（小学部２年自立活動　小学部５年自立活動）
2/ 7(火)	〃　⑧	グループのまとめ

（２）提示授業

月日	内　容
6/16(木)	小学部３年２組　自立活動　「触ってみよう」
6/24(金)	小学部３年２組　自立活動　「スイッチで遊ぼう」
7/ 5(火)	小学部２年２組　自立活動　「手を動かして触れよう」
9/6(火)	小学部４年２Ａ組　自立活動　「からだをうごかそう」
9/7(水)	小学部２年２組　自立活動　「アンパンマンと遊ぼう」
9/15(木)	小学部４年２Ａ組　自立活動　「からだをうごかそう」
10/20(木)	小学部４年２Ｂ組　自立活動　「元気にからだをうごかそう」
11/8(火)	小学部３年２組　自立活動　「よく見て遊ぼう」
12/7(水)	小学部３年２組　自立活動　「触ってみよう　やってみよう」
12/14(水)	小学部２年２組　自立活動　「からだをうごかそう」
1/19(木)	小学部２年２組　自立活動　「すわってあそぼう」
1/24(火)	小学部５年２組　自立活動　「えらんで、手を動かして　～はらぺこあおむし～」

提示授業後に、授業者と参観者、担当研究部員の５～６名でミニ授業研究会を行った。①授業者の反省②参観者から③今後の改善点の流れで 20 分程度実施した。

２　授業実践

（省略）

３　実践を終えて

本グループは自立活動の時間における指導を検証場面として授業実践を行った。授業検討会では、「対象児童の好きなこと、好きなものは何か」という問いが多く、グループ内で児童の興味・関心を共有しながら、授業者以外の教師から、教師のねらいと児童のめあてについて、それに対する学習活動の内容や流れ等について新しい視点で意見をもらい、それを取り入れながら授業を再考することができた。一人一人の各授業実践から、児童の興味・関心から学習活動を組み立てていくことで、児童が主体的に学習に向かう様子が見られ、授業のねらい達成にもつながった。

授業実践やミニ授業研究会を通して、児童の「好きなこと」を取り入れる他に、教師と児童のやり取りがある見立て遊びの要素が含まれること、ストーリー性のある学習展開をすることが、児童が主体的に学ぶことに有効であることが分かった。

「個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導」が自立活動であり、全ての項目が関連し合っている。例えば「身体の動き」を主とした課題であっても、他項目も関連付けていくこと、身近な教師とのやり取りの中で、児童がやってみたい気持ちを言葉や動作で表現したりして取り組めるように学習活動を設定していくことが重要である。児童が学んだことを他の場面でも発揮できるように、自立活動の指導に当たる際は、授業者だけでなく児童に関わる教師による複数の視点で実態把握と課題の設定をし、指導目標や学習活動を検討していきたい。さらに、児童の学びを広げたり深めたりするために、自立活動の時間における指導のみならず、教育活動全体に関連付けていきたいと考える。

Ｄグループ（小中学部３組　教科別の指導・自立活動）

１　研究計画

（１）授業検討会

月日	研究・研修	内　容
5/30(月)	グループ研究会①	グループ研の進め方について
6/27(月)	〃　②	授業検討会（小学部５年算数科、小学部６年社会科）
7/14(木)	〃　③	授業検討会（小学部６年自立活動）
8/26(金)	〃　④	授業検討会（小学部４年算数科）
9/20(火)	〃　⑤	授業検討会（小学部１年国語科）
10/13(木)	〃　⑥	授業検討会（中学部１年数学科、中学部１年英語科）
11/22(火)	〃　⑦	授業検討会（小学部４年音楽科）
12/15(木)	〃　⑧	授業検討会（中学部３年数学科）
2/ 7(火)	〃　⑨	グループのまとめ

（２）提示授業

月日	内　容
7/ 4(月)	小学部５年３組　算数科　「小数のわり算」
7/15(金)	小学部６年３組　社会科　「天皇中心の国づくり」
8/26(金)	小学部６年３組　自立活動　「Ｓ探そう　Ｍ見つけよう　Ｔ挑戦しよう」
9/ 5(月)	小学部４年３組　算数科　「がい数」
10/18(火)	中学部１年３組　数学科　「負の比例定数」
10/19(水)	小学部１年３組　国語科　おもいうかべながらよもう「くじらぐも」
11/ 9(水)	中学部１年３組　英語科　Unit８「A Surprise Party」
12/ 8(木)	小学部４年３組　音楽科　「曲の気分を感じ取って歌おう」
12/21(水)	中学部３年３組　数学科　「三平方の定理」

提示授業後に、授業者と参観者、担当研究部員の５～６名でミニ授業研究会を行った。①授業者の反省②参観者から③今後の改善点の流れで 20 分程度実施した。

２　授業実践

（省略）

３　実践を終えて

実践した授業は学部・教科等の違いはあるが、身近なことや日常生活と関連させて導入を工夫することで、学習への意欲が高まり、問題意識をもって主体的に取り組む姿が見られた。ねらいの精選や興味・関心を生かした学習活動の設定、自分で解決していくことができるような手掛かりや教材の工夫をすることで、思考の過程を言葉で説明したり、意見や考えを積極的に書いたり発表したりして集中して取り組むことにつながった。

学びを深めるためには、児童生徒の意見やつぶやきを大切にし、児童生徒同士の話合いや教師とのやり取りの場を設定するなどの手立てが有効だった。また、十分な教材理解・分析に基づき、児童生徒の思考を深めていくための教師の問いの在り方がとても重要であるとともに、児童生徒の気付きを待つ教師の姿勢が大切であることを実感した。

本研究グループの教師は一人で行う授業が多いため、グループ研を通して一人では気付かないことを多角的な視点で考え、他の教師の授業のよかった点を共有したり課題を認識したりすることで、自身の授業づくりに生かすことができた。授業検討会やミニ授業研究会では、学習活動の計画やまとめ・振り返りのポイント、板書の仕方等について意見を交わし、学び合うことができた。グループ研を通して得たことを今後の授業改善に生かし、児童生徒の主体性を育んでいきたい。

Ｅグループ（中高等部１組　教科別の指導・自立活動）

１　研究計画

（１）授業検討会

月日	研究・研修	内　容
6/21(木)	グループ研究会①	授業検討会　高等部１組　数学Ａグループ 高等部１組　数学Ｂグループ
8/26(月)	〃　②	授業検討会　中学部１組　数学Ｂグループ 高等部１組　国語Ｂグループ
9/20(月)	〃　③	授業検討会　中学部１組　社会Ｂグループ 高等部１年１組　自立活動
10/13(木)	〃　④	授業検討会　中学部１組　数学Ｂグループ 高等部１組　自立活動
11/22(火)	〃　⑤	授業検討会　高等部３年１組　自立活動 高等部１組　国語
2/ 7(火)	〃　⑥	グループのまとめ

（２）提示授業

月日	内　容
7/ 5(火)	高等部１組　数学Ａグループ　「概数（切り上げ）で見積もろう」
7/19(火)	高等部１組　数学Ｂグループ 「ビンゴゲームに挑戦～数字のマッチング・数字の位置」
9/12(月)	中学部１組　数学Ｂグループ　「数を数える」
9/29(木)	高等部１組　国語Ｂグループ　「ようすをあらわすことば」
10/12(木)	中学部１組　社会Ｂグループ　「この国はどんな国？」
10/24(月)	高等部１年１組　自立活動　「気になることを調べて発表しよう」
11/14(月)	中学部１組　数学Ｂグループ　「大きいと小さい／同じ色はどれ？」
12/12(月)	高等部３年１組　自立活動　「自分の意思を伝えよう」
12/14(水)	高等部１組　国語　「体の部位を表す言葉　～手をたたこう、足を鳴らそう～」
12/19(月)	高等部３年１組　自立活動　「卒業後の生活につなげよう」

提示授業後に、授業者と参観者、担当研究部員の５～６名でミニ授業研究会を行った。①授業者の反省②参観者から③今後の改善点の流れで 20 分程度実施した。

２　授業実践

（省略）

３　実践を終えて

本グループでは、１組における教科別の指導と自立活動の授業実践を行った。身近なことや生活場面につながる題材を設定したり、体験活動を取り入れたりすることで、生徒が、題材に興味や関心をもち、意欲的に学習に取り組むことにつながった。また、題材の精選やシンプルで分かりやすい学習活動の展開は、「学びたい」「やってみたい」という学習意欲を高め、「できた」「わかった」という達成感につながった。

授業研究を通して、学びを深めるためには、学習集団や個別の目指す姿と関連付けた題材設定や具体的な個々のめあての設定、その達成のための個々に応じた手立てや教材・教具の工夫、さらに、生徒同士の関わり合いの場の設定や体験活動が有効であった。また、学びの定着を図るためには、生徒の実態に合わせて、ねらいをステップアップさせていくことや、学習したことを他の授業や生活の場面に関連付ける題材設定や指導計画が大切であることを実感した。

本グループでは、教科別の指導を展開していくうえで、実態の異なった生徒一人一人へのアプローチの仕方を探ってきた。自立活動においては、卒業後の生活につながるための具体的な手立てや方法などを探ってきた。授業検討会では、略案から、単元や題材、授業展開などについて話し合った。複数の目を通して、様々な視点や角度から考えたり、実態とめあての整合性や学習活動の有効性を見直したりすることができ、教師各々の授業力の向上につながった。ミニ授業研究会では、意見交換を行いながら、めあての設定やまとめの方法、計画的に授業を組み立てることの重要性、学習活動の展開の仕方など、授業を行うための大切なポイントを授業を通して一人一人が再確認することができた。

Ｆグループ（中高等部２組・４組　教科別の指導・自立活動）

１　研究計画

（１）授業検討会

月日	研究・研修	内　容
5/30(月)	グループ研究会①	授業検討会（中学部１年自立、高等部２・３年国語）
6/21(火)	〃　②	授業検討会（高等部２年自立）
7/14(木)	〃　③	授業検討会（中学部２年自立）
8/26(金)	〃　④	授業検討会（中学部３年自立、高等部３年自立）
9/21(水)	〃　⑤	授業検討会（中学部３年数学、高等部１年国語）
10/13(木)	〃　⑥	授業検討会（中学部２年自立、中学部２年自立）
2/ 7(火)	〃　⑦	グループのまとめ

（２）提示授業

月日	内　容
6/ 6(月)	高等部２・３年２組　国語科　「物語の世界へ　きょうはよいてんき～役を演じよう②～」
6/21(火)	中学部１年２組　自立活動　「びりびり、どろどろ～紙粘土ができるまで～」
7/ 5(火)	高等部２年４組　自立活動　「お祭りであそぼ～的当てゲームをしよう～」
7/20(水)	中学部２年２組　自立活動　「伝えよう～自分の気持ち、好きなもの～」
9/ 8(木)	高等部３年２組　数学科　「何が釣れるかな？体験遊び　ギョギョギョつり」
9/15(木)	中学部３年２組　自立活動　「ほかほかやきいも　できるかな？」
10/13(木)	高等部１年４組　国語科　「わたしのワンピース」
10/19(水)	中学部３年２組　数学科　「みて、さわって、ケーキをつくろう」
11/ 7(月)	中学部２年４組　自立活動　「目を動かしておもちゃを動かそう」
1/26(木)	中学部２年２組　自立活動　「道具を操作しよう～掲示物作り～」

提示授業後に、授業者と参観者、担当研究部員の５～６名でミニ授業研究会を行った。①授業者の反省②参観者から③今後の改善点の流れで 20 分程度実施した。

２　授業実践

（省略）

３　実践を終えて

個別の授業において、どのように活動内容を組み立てるとよいのかが課題となった。生徒の好きなことを取り入れた題材設定、体力や集中力を考慮した学習内容や構成、興味を引き付けるようなストーリーをもたせた展開などを工夫することで、時間いっぱい学習に気持ちを向けて夢中で取り組むなど、主体的に学ぶことにつながった。

目標が明確な授業にするためには、何のためにこの学習をするのか（活動の必然性）、この学習のゴールはどこか、次のステップはどこかなど、少し先の見通しをもった題材計画も大切であることが分かった。また、教師とのやり取りが授業の中心になるため、教師自身が教材であることを意識し、話し方や演示、評価の仕方など、持ち味を生かすことが、個々の目標を達成するための学習効果につながると言える。

グループ研でたくさんの授業を検討することで、他の授業の学習内容や手立てを知る機会になり、今後の学習の進め方の参考になった。個別の授業においては、一人で計画を立てて実践することが多いため、他の人の意見を聞くことによって、新たな考え方が加わったり、不安が解消されたりと、今後の授業づくりにおいて得ることが多かった。

Ｇグループ（情報機器・支援機器の活用）

１　研究計画

（１）授業検討会

月日	研究・研修	内　容
5/30(月)	グループ研究会①	授業検討会（中学部３年自立活動）
6/21(火)	〃　②	授業検討会（小学部３年自立活動　中学部３年自立活動）
8/29(月)	〃　③	授業検討会（中学部３年自立活動）
9/20(火)	〃　④	授業検討会（高等部１年情報　小学部・中学部合同理科）
10/13(木)	〃　⑤	授業検討会（中学部２・３年美術）
11/22(火)	〃　⑥	授業検討会（高等部３年自立活動）
2/ 7(火)	〃　⑦	グループのまとめ

（２）提示授業

月日	内　容
7/11(月)	中学部３年２組　自立活動　「見て、聴いて、触れて」
7/13(水)	小学部３年１組　自立活動　「あいてにようじをつたえよう」
9/14(水)	中学部３年２組　自立活動　「聞く、触る、感じる」―楽しい気持ちを伝えよう―
10/ 3(月)	高等部１年１組　情報　「タブレット端末でやってみよう！」
11/ 8(火)	小学部４・６年３組　中学部１～３年１組・３組　理科 「きらり支援学校からみんなで月へ行こう」
11/25(金)	中学部２・３年１組　美術　「ペイント３Ｄで絵を描こう２」
12/ 6(火)	高等部３年２組　自立活動　「おもてなし活動②～動く、感じる、伝える～」

提示授業後に、授業者と参観者、担当研究部員の５～６名でミニ授業研究会を行った。
①授業者の反省　②参観者から　③今後の改善点の流れで２０分程度実施した。

２　授業実践

（省略）

３　実践を終えて

児童生徒の実態に違いはあるものの、実践した授業によって、「入力（新しい技術・表現方法を学ぶ）―処理（学んだ内容を練習する）－出力（実践する）」という授業構成を設定することで、児童生徒が学んだ内容の定着に結び付き、それらを実践することで自信につながった。コミュニケーションや、表現、制作等を支援するＩＣＴ機器を活用することで「やってみよう」という学習意欲を喚起し、児童生徒が主体的に行動する姿につながった。

また、児童生徒の学びをより深めるために、生徒の実態に応じて即時評価をしたり、ＩＣＴを活用したりして日々の学習の様子を記録して評価をすることが大切である。さらに、モニターにお互いの学習活動の様子をリアルタイムで表示して、生徒同士で機器の操作方法を教え合ったり、課題解決に向けて話し合ったりするなどの場面を設定していくことも大切である。

本グループの授業検討会では、「入力－処理－出力」の情報処理モデルの視点で協議することで支援を分析し、より具体的に授業を組み立てることができた。また、意見交換を通してＩＣＴ機器を活用する必要性について検討し、生徒の実態やねらいによってＩＣＴ以外の支援機器を使用したり、アナログや体験活動を優先させたりなど、主体的な児童生徒を育む上で必要となる支援は何かを考え、指導の効果を高めることができた。

Ｈグループ（中高等部１組　キャリア教育・各教科等を合わせた指導）

１　研究計画

（１）授業検討会

月日	研究・研修	内　容
5/30(月)	グループ研究会①	授業検討会（中学部作業学習、高等部３年職業科）
6/21(火)	〃　②	授業検討会（中学部１年生活単元学習）
7/14(木)	〃　③	中１生活単元学習の提示授業と協議
8/26(金)	〃　④	授業検討会（中学部１年生活単元学習　高等部２年職業科）
9/26(月)	〃　⑤	授業検討会（高等部１年生活単元学習　高等部作業学習）
10/13(木)	〃　⑥	授業検討会（中学部２年総合的な学習の時間）
11/22(火)	〃　⑦	授業検討会（中学部３年生活単元学習）
12/19(月)	〃　⑧	授業検討会（中学部作業学習）
2/ 7(火)	〃　⑨	グループのまとめ

（２）提示授業

月日	内　容
6/15(水)	高等部３年１組　職業科　「社会人の心構え～仕事のやりがい～」
6/20(月)	中学部１組　作業学習　「油グッバイづくり～かがやきの丘祭りで販売しよう～」
7/ 5(火)	中学部１年１組　生活単元学習 「キラ☆スマプロジェクト～ボトルフラワー制作に挑戦～」
9/21(水)	高等部２年１組　職業科　「余暇の過ごし方～休みの日の過ごし方～」
10/12(水)	高等部１年１組　生活単元学習 「秋田県マイスターになろう～おもしろい！ふるさとの言葉秋田弁～」
10/13(木)	中学部１年１組　生活単元学習 「キラ☆スマプロジェクト～ボトルフラワーをプレゼントしよう～」
10/14(金)	高等部１組　エコグリーン班　作業学習 「花いっぱいプロジェクト②～秋まき植物を育てて販売・プレゼントしよう、ラベンダーの香り袋を作ろう～」
11/29(火)	中学部３年１組　生活単元学習「トラベル秋田ガイドＴＶ」
１/17(火)	中学部２年１組　総合的な学習の時間「余暇について考えよう」
1/25(水)	中学部１組　作業学習「油グッバイづくり～職員販売会に向けて～」

提示授業後に、授業者と参観者、担当研究部員の５～６名でミニ授業研究会を行った。①授業者の反省②参観者から③今後の改善点の流れで 20 分程度実施した。

２　授業実践

（省略）

３　実践を終えて

職業科や作業学習、生活単元学習と実践した授業は異なるものの、何のために、誰のためにという動機付けを明確にすることで、生徒たちが「やってみよう」「楽しみ」など学習への興味・関心をもつことや意欲につながり、より主体的に学習に取り組むようになった。学習活動においては、十分な活動時間を確保することの他、生徒自身が活動できるように、動線を確保したり手順表を示したり、教材・教具を工夫したりすることで、生徒ができたという達成感を得ることにつながった。授業検討会やミニ授業研究会では、めあてについても話題となり、提示された生活単元学習のめあてを例にグループで改善案を協議した。活動とめあてを分けて考えることが、より具体的なめあての設定に有効であった。

実践を通して、一つの教科についてもっと深く検討したかった、生徒同士が関わる場面を設定することでもっと考えを深めることができたのではないかという課題もあったが、様々な授業について意見交換することで、生徒の目指す姿と関連付け、主体的に学ぶために目標設定や学習活動、教師の手立てについて具体的な意見が出され、授業づくりに生かすことができた。また、授業後には、個々に実践を振り返り、問題点や改善点について教師間で話し合う機会となったことや、今後の授業における目標の妥当性について深く考える機会となった。今後も、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現できる過程であるキャリア発達の視点も大切にして、生徒一人一人の自立と社会参加につなげる実践をしていきたい。

Ⅲ　各種研究大会発表

第 60 回東北地区肢体不自由教育研究大会（山形大会）

藤原恵理子
高澤衣久子

第 61 回全日本特別支援教育研究連盟全国大会秋田大会

熊地　勇太

第 2 回北海道東北地区病弱虚弱教育研究連盟研究協議会福島大会

佐藤　友香

第 63 回全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会山口大会

藤原恵理子
小林佐知子

第３分科会　「知的障がいを伴う子供の教科指導の実践」

生徒が「声を出したい」「鳴らしたい」と思える音楽科の実践
～選曲、活動内容、楽器の工夫を中心に～

秋田県立秋田きらり支援学校　教諭　藤原　恵理子　　教諭　高澤　衣久子

１　はじめに

秋田県立秋田きらり支援学校（以下、本校）は、肢体不自由を対象とした特別支援学校であり、病弱の児童生徒も在籍している。在籍数は年々減少傾向にあるが、小・中学校、高等学校に準ずる教育課程（Ⅰ類型)、本校在籍児童生徒の大部分である知的障害代替の教育課程（Ⅱ類型)、自立活動を主とした教育課程（Ⅲ類型）で編成されており、本校に隣接する秋田県立医療療育センターや自宅への訪問指導も行っている。

高等部では、Ⅰ～Ⅲ類型の全生徒合同で音楽科の学習を行っている。生徒の実態は多様だが、誰もが「音楽って楽しい」と思える授業づくりを心掛け、実践している。

２　実践

（１）「声を出したい」と思える工夫の実際

発声練習では、音程や声量よりも『声を出すことを楽しむ』ことを目的としている。一人一人の生徒が好きな物や人等の画像が目の前の大きなモニターに表示されると、「私の好きな物だ！」と笑顔になり、元気よく発声していた。次のステップでは、一定のテンポでビートが刻まれる中でリズミカルに単語を発声し、更なるステップとして、簡易な音程を付けて発声をした。このように生徒の意欲を大事にしたスモールステップによる発声練習が、やがて「歌いたい」という意欲につながると考えた。どの生徒も回を重ねるにつれ、自信をもって大きな声を出すようになった。

（２）「鳴らしたい」と思える器楽合奏の取組

①選曲の工夫

本事例で取り上げる曲は、Ｌ．アンダーソンの「シンコペーテッド・クロック」「サンドペーパー・バレエ」である。アンダーソンはタイプライターや紙やすりのような日用品を楽器として用い、軽快でこっけいな曲調で作曲している。生徒にとって親しみやすく、面白さを感じやすい曲であると考えた。

②楽器の工夫

多くの生徒は上肢の麻痺や可動域の狭さなどにより、楽器を鳴らす上で難しさがある。そこでタイミングがずれても合奏として成り立つよう、打楽器を中心にリズム合奏として曲をアレンジした。また、生徒が自力で演奏できるように、生徒一人一人の実態に応じた楽器や補助具を準備した。シンバルを担当した生徒は、電子ドラムキットでの演奏に取り組んだところ、自分の力でより上手に、そして確実に音が鳴らせることを実感し、達成感を味わうことができた。

③観客から見た面白さ

打楽器は叩くだけではなく、こすったり、引っ張ったり、振ったりして音を鳴らすという特徴がある。本事例では、楽器以外の身近な道具を使用する意外性など、見ている人にとっても楽しんでもらえる要素がある。

３　まとめ

本校高等部の音楽活動は、平成２２年の開校以来、様々な行事や教科等と関連付けながら、学習活動の中心となっている。コロナ禍で制約がある中でも、声を出す楽しみ、喜び、自分でできる楽器演奏などを模索してきた。

多くの支援で演奏するのではなく、自力で合奏に参加できる喜びを多くの生徒が味わえるよう、生徒の実態に応じ、思い（願い）を叶える授業づくりを今後も継続して取り組んでいきたい。

第 11 分科会　障害の特性等に応じた指導上の配慮の在り方

情報機器を活用した各教科等を合わせた指導

～情報機器操作と伝える力の向上を目指した指導の工夫（生活単元学習）～

秋田県立秋田きらり支援学校　教諭　熊地　勇太

Ⅰ　実践にあたって

本校は肢体不自由及び病弱者の児童生徒を対象とする特別支援学校である。
本学級は男子１名、女子１名で、両名とも知的障害と脳性まひを併せもち、知的代替の教育課程で学ぶ中学部１年生である。両手にまひがあり、「書く」という活動に時間がかかる、もしくは難しいことや自分の考えや気持ちをうまく伝えることができないなどの課題がある。見通しがもてないことに強い不安を抱く傾向があるが、学習に意欲的で様々なことに興味や関心を示し、自分の役割には責任をもって取り組むことができる。

このような生徒の実態から、興味・関心の高い東京オリンピック・パラリンピックをテーマにすることで、意欲をもって積極的に活動に取り組むのではないか。また、学習内容を調べ学習、インタビュー、新聞作成の３つで構成し、繰り返し行うようにすることで、情報機器の操作の仕方を覚え、相手に分かりやすく伝える力が向上し、普段の生活に生かされていくのではないかと考えた。さらに多様な学習内容を関連させ、思考を広げたいと考え、各教科等を合わせた指導（生活単元学習）で実践することとした。学習では、パソコンやタブレット端末、本を活用してオリンピックの概要を調べ、秋田県出身又は秋田県で活躍するオリンピック出場選手にインタビューし、インタビューの際に聞いたことや感じたことをまとめ、新聞を作成し、インタビューをした選手や校内の職員に配付した。年度末には展示会を実施し、生徒や職員に紹介し、自分たちで学習したことを説明したり、見た人から感想をもらったりして１年間のまとめとした。この学習を通しての工夫について報告する。

Ⅱ　実践内容

１　東京オリンピック選手へのインタビュー

（１）ＶＲ（Virtual　Reality）での仮想体験（写真１）

体の動きに制限があるため、オリンピック競技を実際に体験することは難しかったが、カヌーやバドミントン等、インタビューをする前に、選手が行っている競技をＶＲで仮想体験した。競技のスピード感や衝撃を体感した。自分たちがＶＲを使って体験したことを他学年にも紹介し、ＶＲ体験会も行った。また、選手の競技やルール、活躍している様子が分かる写真や動画、実際の新聞記事を提示し、じっくりと見る時間を設けることで、インタビュー内容を考える手掛かりとした。

写真１　ＶＲでの仮想体験

（２）新型コロナ感染症対策に配慮したインタビューの実施

新型コロナ感染症予防やオリンピック選手の遠征のため、実際に会えない時期があったが、ＩＣＴを活用した方法でインタビューを行った。直接会ってのインタビューが１名、メールが２名、ＺＯＯＭが１名の４名のオリンピック選手と関わった。メールでのインタビュー時は、大型ディスプレイにタブレット画面を映し出し、教師と生徒二名が一緒に見られるようにした。また、ＺＯＯＭでも大型ディスプレイに相手の画面の他、自分たちの様子も映し、どのように相手に見えているかを分かるように工夫した。（写真２）

写真２　ZOOM でのインタビュー

2　新聞作成

（１）入力への配慮

「書く」ことへの苦手意識や難しさ、活動時間を考え、始めはパソコンで新聞を作成しようとしたが、パソコンの画面やキーボードは見る範囲が広く、入力の際も手の移動が大きく、生徒の意欲を継続することが難しかった。そこでタブレット端末を活用することにした。50 音順になっている日本語かな入力、キーボードと同じ配置のローマ字入力を生徒の実態に応じて選ぶことができ、予測変換も可能なため、文字入力時間を短縮し、生徒の集中力を持続することができた。同時に音声入力の指導も行った。音声入力については、はっきりとした口調で話さないと自分が意図しない言葉で入力されてしまったり、同音異義語の入力が難しかったりするところがあるが、文字入力と組み合わせて使用することでスムーズな入力につながった。間違っても簡単にやり直しができることはタブレット端末の利点である。活動時間に応じて、文字入力にするか、音声入力にするかを自分で判断する場面を設定した。

（２）アプリの活用（写真３）

無料でダウンロードでき、オリジナルの新聞を作成することができる新聞作成アプリ「号外メーカー」を使用した。６つのレイアウトスタイルがあり、レイアウトにより入力できる文字の数が違うため、記事の内容や生徒の実態に合ったものを選択できる。また、見出しの色や文字の大きさも、何通りかの選択肢の中から自分で選べるため、生徒自身が全体のバランスを考えながら取り組むことができた。完成後は写真データとして保存し、生徒の振り返りに役立てた。作成の際には、実際の新聞の提示や国語の教科書に記載されているポイントを提示した。

写真３　作成した新聞

（３）相談し合える環境の設定（写真４）

同じアプリを使い、同じ作成の仕方をする事で相談しやすい環境を整えた。コロナ禍でお互いのタブレット端末を見合う事が難しかったため、２台の端末画面をディスプレイに同時に映し出した。お互いの画面が見えることにより、新聞を比較し合うことや進行状況の確認、見出しと記事の内容が合っているかなどの意見交換をすることができるように工夫した。また、記事の確認や意見交換の時間を学習のまとめで必ず設けるようにした。

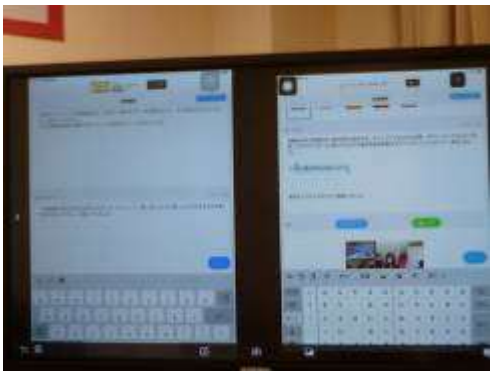


写真４　２台の端末画面

3　新聞の配付と展示会の開催

（１）新聞の配付（写真５）

作成した新聞を選手や学校の職員に配付し、インタビューのお礼やどのように作ったのか等を伝える機会とした。新聞を渡す人とお礼等を話す人の役割分担をし、話すことや渡すこと等行動の順番を決めることで、見通しをもって活動できるようにした。

写真５　選手への新聞配付

（２）展示会（写真６）

自分たちが１年間取り組んできたことのまとめとして、展示会を開催した。作成した新聞の他、インタビューの全ての内容を掲示したり、ＺＯＯＭの録画を見たりできるようにした。事前の準備では会場のレイアウトを自分で考えたり、新聞等の貼る位置を決めたりする学習を行った。また、どんな役割があると良いかについても相談し、役割分担（手指消毒、案内、説明）を決める時間を設けた。来場者には付箋に感想を記入してもらい、展示会終了後に生徒が感想を見る時間を設定した。

写真６　展示会の様子

Ⅲ　成果と今後の課題

１　成果

・ＶＲを通して競技の特徴を感じることにより、質問を考える際の観点の幅が広がり、より自分で考えたり、体験した感想を伝えたりする姿を引き出すことができた。

・インタビューを繰り返すことで「感動した」「凄いと思った」と自分の気持ちを率直に表現することが増えた。「自分だったら〇〇だろう」「自分には苦手なことがある。オリンピック選手にも苦手なことはあるのか。それをどう克服しているのか」等、選手から聞いた経験や言葉を自分に置き換えて考えることに発展した。

・文字入力と音声入力の使い方が分かり、時間を見て文字入力にするか、音声入力にするかを自分で判断することにつながった。タブレット端末の基本操作や使い方を覚え、この活動においては、自分たちで活動を進められるようになった。

・生徒に合ったアプリを活用することにより、生徒が「上手くできない」、「難しい」というようなもどかしさを感じることなく、楽しみながら活動に向かうことができた。出来映えの良い新聞が完成することで、次時への意欲も高まった。

・お互いの端末画面を同時に映すことにより、自然と見やすさや見出しについて２人で話し合う姿が見られた。また、「ここはこうしたほうがいい」「こんな言葉はどうかな」等、自分の考えを伝え合う場面も見られた。

・新聞を配付したり、紹介したりすることで、職員や来校した方に話しかけられることが多くなり、分かりやすく説明したり、感想を話したりする場面が増え、伝え方や話し方を自分で考えるようになった。また、保護者にも制作した新聞を配付することで、家庭内で話題にしたり、ネットニュースで選手の活躍を調べたりする姿が見られるようになった。

２　今後の課題

・タブレット端末は便利であり、生徒の意欲も向上するが、ねらいを教師側がしっかりもつことやタブレットだけに夢中になりすぎないように、使う場面、使わない場面のメリハリをつけることが大切であった。

・タブレット端末のダブルタップやスワイプが難しい生徒に対して、アシスティブタッチや外部スイッチ等の工夫が必要な場面があった。使用する生徒に合ったタブレット端末の設定が重要である。

・教師側が生徒の実態を把握し、生徒に合ったアプリを探すことやその使い方を工夫することが引き続きの課題として挙げられる。

・自分の伝えたいことをまとめて話すことができるようになってきたが、伝え方について今後も指導が必要だと考える。また、文章のまとめかたについても「人に伝える文章」「要約のポイント」をさらに身に付けていくことができるように他の授業の中で今後も継続していく。

・自分たちで相談しながら活動を進めていくことができるよう、意図的に相談場面を設定したり時間を確保したりすることも課題である。

「卒業後も人や社会と関わり合う生活を目指して」～ICT 等を活用した学習保障や進路指導の取組～

〔所属名〕秋田県立秋田きらり支援学校
〔職名〕　教諭
〔氏名〕　佐藤友香

１　はじめに

秋田県立秋田きらり支援学校（以下、本校）は、肢体不自由を対象とした特別支援学校であり、肢体不自由教育の教育課程のみを設置しているが、在籍する児童生徒には、病弱の児童生徒もいるほか、秋田市内の総合病院入院幼児児童生徒への学習支援やセンター的機能による相談支援も行っている。本県唯一の病弱担当校としての機能強化のため「病弱教育サポートセンターきらり☆」を令和２年度から校内に設置している。

在籍数は年々減少傾向にあるが、小・中学校、高等学校に準ずる教育課程（Ⅰ類型）、本校在籍児童生徒の大部分である知的障害代替の教育課程（Ⅱ類型）、自立活動を主とした教育課程（Ⅲ類型）で編成されており、本校に隣接する秋田県立医療療育センター（以下、医療療育センター）や自宅への訪問指導も行っている。毎年、全校児童生徒の１割以上が訪問教育の対象となっている。

＊　R3：１４名／１０５名　R4：１１名／９７名
（訪問児童生徒数／全校児童生徒数）

２　対象生徒の実態

Ａは、令和３年度に本校高等部を卒業した生徒である。小学部から１２年間本校に在籍し、週３回、自宅での訪問教育を実施していた。Ａの高等部１年次～３年次の取組について取り上げる。

（１）姿勢・体の動きについて

・一日をベッド上で過ごす。姿勢は仰臥位。体位の変換や自分の意思で体を動かすことは難しい。
・学習時は母親が同じ部屋にいて、医療的ケアを行う。骨が弱く骨折の危険があるため、制作活動等の手指を使う活動は、母親に学習のサポートを依頼し、取り組む。

（２）コミュニケーションについて

・目が自分の意思で動かすことのできる唯一の部位で、主にまばたき（まぶた）や目（眼球）の動きでコミュニケーションを取っている。日常の会話を聞いておおまかに理解し、挨拶に対してまばたきをしたり、YES/NO で応えられる質問にまばたきで応えたりすることで気持ちを伝える。まばたきの強弱で「どれくらい」を表したり、眼球の動きで迷いや戸惑いを表したりする。
・自分で心拍を上げ、意図的にアラームを鳴らすことで要望があることを伝える。涙を流して気持ちを伝えることもある。
・人との関わりが好きで、初めて会う人にも、まばたきで挨拶をし、相手の言葉掛けを受けてやり取りができる。

（３）人との関わりについて

・同学年の生徒たちはＡに対する仲間意識があり、スクーリングやオンライン交流の際は積極的に言葉を掛ける。会話ができる友達と１対１での関わりであれば、教師が仲立ちをしなくてもやり取りが続く。

（４）余暇の過ごし方について

・自宅ではテレビを見て過ごすことが多い。自分で好きな番組を選び、まばたきで母親に伝える。好きな番組は長い時間楽しむことができる。歌や CM のフレーズを覚え、リズムに合わせてタイミングよくまばたきをして楽しむ。

（５）生活経験について

・体温調整が難しく、環境の変化で体調を崩しやすい、感染症にかかると重症化しやすい等の理由により、外出が難しい。カニューレ交換のための入院（１回/１年）と、学校祭へのスクーリング（１回/１年）が貴重な外出の機会になっており、生活経験が極端に少ない。
・胃ろうのため飲食はできないが、舌の上に食べ物を乗せることで味わい、家族と一緒に毎日の食事を楽しんでいる。

（６）その他

・家族は、学校や友達とのつながりを大切に考えており、友達と関わる学習を優先して欲しいと希望している。

３　指導の方針

・在宅訪問生であっても、学部・学年の一員として、学校とのつながりを感じられる指導
・友達や様々な人との関わりの中で「自分の気持ちを伝える」手段の充実と意欲の育成。
・コロナ禍であっても、これまで積み重ねてきた「人と関わる」学習機会の保障
・ICT（主に Zoom）を活用したオンライン授業への参加
・コロナ禍による ICT の活用を機に、保護者（主に母親）の積極参加の促進（Zoom の設定等）
・卒業後の社会参加へつなげる ICT の取組

４　指導の実際

（１）コロナ禍以前の学習について

ア　タブレット端末を使った日常の関わり

コロナ禍以前からタブレット端末を活用し、Ａが学校や学年の友達とのつながりを感じられるように、指導を行ってきた。主な内容は次のとおりである。

・訪問日当日の「学年朝の会」の様子を動画で見ることで、友達の様子や学校の予定を知る。健康観察で友達からの呼名に応える活動を通して、友達とのつながりを日常的に感じる。
・学年活動の話し合いの様子を担任が撮影・編集した動画を見て、様々な友達の考えを聞き、誰の意見に賛成かを伝える。
・学年行事の内容を知り、参加方法ややりたい役割を選択し、伝えることで、学年の中での役割意識をもって参加する。

以上の活動は、事前に担任が撮影した動画を訪問時に提示して行うが、指導後にＡの気持ちを学年の友達に伝えることで、双方向の学習になるように進めた。

イ　タブレット端末を活用したオンラインによる授業参加

コロナ禍以前から、年に３回程度、学部や学年行事にオンラインで参加し、友達との関わりを継続してきた。オンラインで授業に参加する際は、担任１名が自宅に訪問して「facetime」で学校とつなぎ、学校では他の訪問職員が対応した。

・オンラインで行事に参加する際は、友達と一緒に「始めの言葉」を話す係を担当する等、役割に取り組むことで「自分も学年の一員として参加している」という達成感を感じることができた。
・行事の終了後には毎回、学年の友達とのフリータイムを設けた。友達との関係性ができているため、画面を通してでも友達とのやり取りを楽しむことができた。

オンラインによる友達とのやり取り

・校内行事への参加のほか、Ａが自宅で行った体育大会の様子を、校内のテレビにオンラインで中継し、Ａとの対戦に誰でも参加できる場を設けた。校内の友達と対戦することで、担任１名の訪問でも、体育大会に参加している雰囲気を感じることができた

体育大会で対戦した友達とのやり取り

ウ　スクーリングによる学校行事への参加

医療療育センターに母子入院する機会を利用して、スクーリングを行い、学校祭のステージ発表に参加したり､友達と直接会って交流したりした。学校の雰囲気や、発表の緊張感、教師や友達との関わりを直接感じられる貴重な機会になった。

エ　同行訪問による担任以外の教師との関わり

季節の学習などを行う際、複数名で自宅に同行訪問することで、担任１名では難しいダイナミックな活動や、数名で祭囃子を演奏するなどの本物体験を取り入れた学習を行っていた。

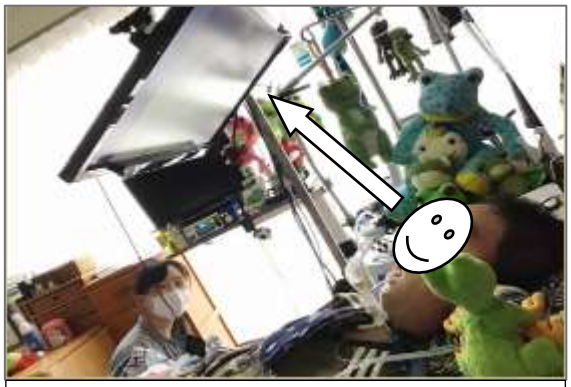
普段接することの少ない教師とやり取りすることで、うまく気持ちが伝わらないもどかしさを感じ、どうしたら気持ちが伝わるかを考える機会になった。

オ　視線入力による選択とスイッチ操作

令和元年度と２年度に、本人と保護者の希望に沿って、月に２回程度、視線入力装置を使った学習を行った。

Ａの視線の動かし方の特徴や、視線の可動域等の実態把握を行い、Ａが視線を動かせる位置に操作しやすい大きさのスイッチを置いた教材を制作して実施した。（教材はPowerPoint で制作）

始めた当初は意欲が高く、視線の動きも活発だったため、写真やイラストから選択する学習ができたが、普段から行っている、まばたきによる選択の方が本人にとって身近だったこともあり、回数を重ねるうちに意欲が低下し、視線が画面に現れなくなることが増えた。



テレビ画面に視線を向けて操作する様子

コロナ禍で、訪問日数の確保が難しくなったこと、集中して画面を見続けて操作するのは本人の体力的に難しいと保護者から要望があったことから、令和３年度は視線入力による指導を休止した。

（２）コロナ禍による学習環境の変化

ア　本人の環境と体調の変化

・令和２年度２月から令和３年度４月に新型コロナウイルス感染症の影響で、学校が３ヶ月休校になった。

・学校以外にも定期的に訪問していた訪問看護師による入浴サービスや訪問リハビリも一時的に利用できなくなった。

・定期的な訪問がなくなったことで、生活リズムが崩れがちになり、体力が落ちて疲れやすくなった。

イ　指導の状況

・令和２年度からは、感染リスクを減らすため、それまで曜日を変えて担当２名が訪問していたところを、主担任１名のみが訪問することとした。それに伴い、訪問の日数を週３日から２日に変更し、指導時間も体力に合わせて短縮した。

・県内の感染状況に応じて、授業が中止になることも度々あった。

・同行訪問を中止し、母子入院やスクーリングもできなくなった。

ウ　社会と学校の状況の変化

・令和２年度のGIGAスクール構想により、校内のICT 環境が整備された。新型コロナウイルス感染症対策として、Zoomを使った双方向コミュニケーションの指導が大幅に増加し、職員や児童生徒にとって日常の取組の一つとなった。

エ　保護者が接続するオンライン学習の準備

・従前のオンライン学習は、担当が自宅を訪問する日のみの実施だったが、コロナ禍の対応として、保護者のみで接続することが可能となった。

・そこで、教師が訪問できない状況に備えて、これまでの学習経験を生かした、保護者接続によるオンライン学習を母親に提案した。

・母親も学習の継続を望んでいたため、接続の協力については了承を得られたが、接続や機器の扱いには不安を感じているという申し出があり、担任がサポートを行った。

・提案時は学校のタブレット端末の貸し出し準備が整っていなかったため、接続は母親個人のスマートフォンを使用し、訪問時にZoomのダウンロードと、接続の仕方を確認した。

・Ａが普段見ているテレビにスマートフォンの画像を映すために必要な「Lightning ケーブル」と「HDMI ケーブル」、スマートフォンを固定する「アーム」を家庭で用意してもらった。（高等部は特例で就学奨励費の対象となったため、実質自己負担なく用意できた）

・訪問日に、Ａの部屋と庭とで接続テストを行うなど、実施に向けて何度か練習を行った。

オ　実施後、見えてきた課題

・オンライン学習をスタートしてすぐの頃は、Zoomにつながらない、テレビに映すスマートフォンの画面が横向きにならない、動画が流れない、等のトラブルが続いた。その都度調べて対応策を考えながら一つずつ解決した。

・教師がその場にいないオンライン学習について、Ａの気持ちも確認しながら準備を進めた。本人も納得した上でのスタートだったが、しばらくは接続トラブルで準備に時間を要したことで、納得ができず、心拍を上げてアラームを鳴らし、不満を表すことが続いた。

・スタートから４、５回（２週間程度）で接続がスムーズになり、Ａの気持ちも落ち着いた。

・母親の協力を得られたことで、コロナの状況に左右されず、Ａの学習機会を確保することにつながった。

学校からＡに話し掛ける様子

（３）感染症予防をしながらの学習の様子

ア　訪問が難しい状況下における、Zoomによるオンライン学習

・Zoomによる学習を行う際、生徒が混乱しないように、学習の流れは今までどおりに行った。
これまでは、タブレット端末の小さい画面で見ていた学校の様子を、普段見慣れている大きい画面のテレビで見ることができ、Ａにとって見やすい環境になった。

・学校とつなぐ機会が増えたことで、これまで以上に友達との関わりが身近になった。また、後輩やこれまで関わりのなかった教師からも（画面を通して）話し掛けられる機会が増え、様々な人とのやり取りに慣れることができた。

・Zoomの機能を使うことで、注目してほしい画面の一部をテレビ画面に大きく提示することができ、提示する情報の精選ができた。

イ　ボランティア人材バンク（地域の人材活用事業）の活用による、自宅での『本物体験』

・コロナ禍で同行訪問やスクーリングが困難な状況となったが、本校開校時から児童生徒への演奏活動を継続している音楽団体「トリオ・ザ・ドルチェ」（ピアノ・フルート・ヴァイオリン・歌）の演者一名が自宅を訪問し、ヴァイオリンのコンサートを行った。

・感染リスクを減らすため、訪問者は体調管理と健康観察を行い、当日に抗原検査を実施した上で自宅を訪問した。

（ア）興味・関心をもって演奏を聴くための工夫

事前の打ち合わせを行い、生徒にとって身近なテレビ番組のテーマソングやＣＭソングを選曲した。演奏前に「何の曲か分かったら教えてね」と、クイズ形式にすることで、興味をもって演奏を聴く姿が見られた。

（イ）主体的に参加するための工夫

Ａも演奏の一部に参加できるように、「シ」の一音のみで演奏に参加できる曲目（子どものためのリコーダー曲集『笛星人』より「ちょっとまってね」）を選曲した。楽器は手の重さだけで音を出すことのできるキーボードを用意し、「シ」の音のみを押せるように細工をした。

当日までの学習の中で演奏の練習を重ねてきたが、コンサート当日に合奏したときには、自分一人で演奏したときとの違いに気付き、「すごい」と何度もまばたきをして感動を表した。

（ウ）成果

目の前で演奏を聴くことで、テレビでは感じることのできない本物の迫力を体験できた。また、個別で行えたからこそ、Ａの実態に合わせた演目で行うことができ、「ただ演奏を聴くだけ」のコンサートではなく、「自分も参加した」と感じることができた。

・初めて会ったヴァイオリンの先生にも、まばたきや目の動きで感動した気持ちを伝えることができた。

・その後の生活場面で、コンサートで聴いた曲を取り上げたテレビ番組を見たり、ＣＭが流れたりすると気付いて、まばたきで母親に伝えたり、「楽しかった」「また聴きたい」など気持ちを伝える姿が見られた。

・本人が喜ぶ様子や前向きに気持ちを伝える様子を見て、演者側からも「こんなに喜んでもらえるなら、卒業してからも演奏に来たい」と申し出があった。

キーボードを演奏する様子

一緒に演奏する様子

演者とのやり取りを楽しむ様子

ウ　オンラインによる修学旅行への参加

・訪問時間を調整し、修学旅行の日程の一部にオンラインで参加する計画を立てた。
・当日は担任が自宅を訪問し、修学旅行隊の学年職員に接続を依頼した。
・オンラインの予定時刻までは、当日朝の出発式や､友達がバスに乗り込む場面の動画を紹介し、修学旅行隊からタイムリーに届く動画を見ながら過ごした。また、一緒に旅行している気持ちを味わえるように、バスからの車窓風景や、見学先で友達が体験する予定になっている花火の映像などをプロジェクターで天井に映した。
・修学旅行隊の日程が大幅に遅れたため、残念ながらオンラインによる参加は実現しなかったが、修学旅行の日程に沿って提示した映像や、友達からのオンタイム動画のおかげで､｢みんなと一緒に参加した｣という雰囲気を味わうことができた。

天井に映した映像で旅行気分を味わう

エ　スクーリングによる学校祭への参加

・コロナ禍のため、毎年行っている医療療育センターへの母子入院はできなかったが､｢友達と一緒にステージ発表に参加したい｣という強い願いから、令和３年度は自宅から登校して学校祭に参加した。

友達とステージ発表・フィナーレに参加

・ステージ発表終了後には、友達の方から自然と「Ａに会いに行こう」という流れになり、直接会って話すことができた。これまで、オンラインによる交流を継続してきたことにより、１年ぶりのスクーリングにおいても友達や教師からの関わりに対して、まばたきや目の動きでうれしい気持ちを大いに表した。

久しぶりに会う友達に囲まれてやり取り

５　卒業後の生活に向けての取組

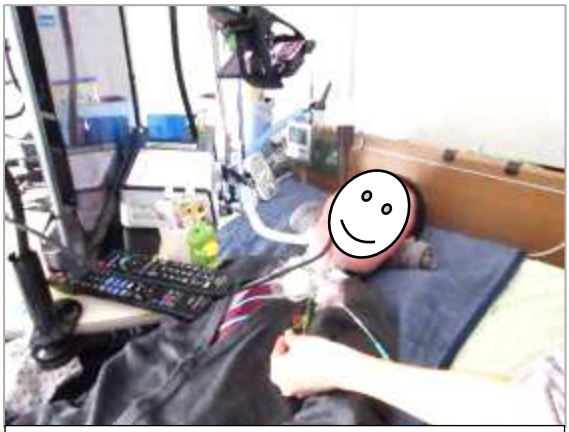
訪問対象生徒の卒業後の進路は、Ａのように移動が難しい場合、入浴等の訪問福祉サービスを自宅で継続利用するという選択が多い。

ここまで述べたとおり、Ａは、これまで様々な状況に応じて ICT を活用しながら、一貫して人と関わる学習活動を大事してきた。進路を選択するにあたっても、この経験を生かした選択となった。最後にこのことについて述べる。

（１）進路決定までの流れ

・Ａを担当している相談支援員が、年に１回自宅を訪問し、家庭の希望やニーズを聞き取ってサービス等利用計画を作成していた。Ａの相談支援事業所である「Ｋ」は、主に生活介護や就労継続支援Ｂ型による支援を行っている社会福祉法人である。
・保護者は高等部入学時から､｢卒業後も、できる範囲でいいので「Ｋ」の訪問療育サービスを受けたい｣と、担任に進路の希望を伝えていた。しかし、令和元年度時点では「Ｋ」のある市町村で､訪問療育サービスは実施していなかった。そこで、１年次は本校の進路指導担当より、家族の要望を相談支援員に伝えた。
・２年次の春に、本校進路担当と担任が「Ｋ」を訪問し、施設長と相談支援員に直接会って情報交換を行った。同時期に「Ｋ」の施設長と相談支援員が生徒の自宅を訪問し、家庭環境や本人の様子を把握し､保護者の要望を直接確認した。その後、相談支援員を通して、在籍の市役所に要望を伝えた。

・３年次の春に、本校進路担当と担任、相談支援員が市役所の担当と面会し、訪問療育サービスの実現に向けた情報交換を行った。
・３年次の冬に、市独自の事業の立ち上げが決まり、「K」の訪問療育サービスを利用できることになった。
・卒業後の訪問療育サービスの実施に向けて、進路指導担当と担任が、「K」を３回訪問し、卒業後に生徒と関わることになる「K」の全職員に対して情報交換会を行った。実際の学習の様子を動画で提示しながら、Aの実態や、コミュニケーションの取り方、オンライン学習の実施状況等の引き継ぎを行った。
・卒業後、令和４年４月から訪問療育サービスが開始した。在学中に本人も保護者もZoomによる双方向型コミュニケーションを十分に経験していたことから、入所式にもオンラインでスムーズに参加することができた。
・今後は月５回程度、訪問療育サービスを受ける予定である。



オンラインで入所式に参加

入所式での決意表明

６　まとめ

（１）成果

・GIGAスクール構想＋コロナ禍でICTの活用が進んだことにより、本校だけではなく社会全体でタブレット端末を活用した双方向型コミュニケーションが日常的な活動になった。それを、保護者のICT活用に結び付けることで、本人の学習機会の保障につながった。
・Aが元々行っていた学習活動やオンラインによる友達との関わりの経験を生かし、環境を整えて学習を重ねたことで、卒業後の生活にスムーズにつなげることができた。

（２）卒業後の充実した社会生活に向けて

・令和４年４月から、訪問療育サービスがスタートした。４月の時点では自宅に訪問しての療育は難しかったが、オンラインによる学習の積み重ねがあったおかげで、卒業後もスムーズにオンラインによるサービス利用ができている。期間を空けずにサービス利用できたことは、Aが自分の新しい所属場所を実感するために、非常に有効だったと感じている。今後、職員が訪問してのサービス利用に向け、オンラインでの利用を継続していく予定になっている。
・本校では卒業生に対して、同窓会活動を行っているが、集まって行う同窓会活動が難しい状況下で、令和３年度からオンラインによる同窓会活動が始まった。Aは学校に行くのが難しいため、これまでは参加をあきらめていたが、オンライン同窓会の予定を聞いて、参加できることを楽しみにしている。オンライン学習の経験と保護者のICT活用は、卒業後の学校とのつながりにも生かされる。
・在学中に実現した自宅でのコンサートは、卒業時の担任が計画し、卒業後も実施する予定になっている。Aの充実した生涯学習の新たな取り組みの一つとして、継続していきたい。

（３）所感

・Aのこれまでの経験とICTを結びつけることを卒業後の進路につなげることはできたが、ICTはあくまでも補完的な物で、本物体験があってこそのオンラインと考える。学校で友達と何度も直接会う経験があったことで、オンラインでも交流できたように、状況が落ち着いたら、「K」の職員も自宅に訪問できることを願う。実体験とICTをうまく活用していくことが、Aのこれからの生活を豊かにすると考える。
・また、ICT の普及により、Aのように外出が難しい人たちの生活が豊かになることや、活躍の場が広がっていくことも願っている。

分科会④センター的役割

病弱教育サポートセンターきらり☆の取組

～在籍校が主体となって進める入院児への支援～

学校名　秋田県立秋田きらり支援学校
発表者　藤原　恵理子
　　小林　佐知子

１　はじめに

秋田県立秋田きらり支援学校（以下、本校）は、秋田県中央部にある秋田県医療療育センター（以下、医療療育センター）に隣接する肢体不自由のある児童生徒を対象とした特別支援学校である。

本県には病弱教育のみを対象とする特別支援学校の設置がなく、国立病院機構あきた病院内にある秋田県立ゆり支援学校道川分教室（以下、道川分教室）とともに県内の病弱児への支援を行ってきた。

令和２年度、病弱教育の推進と本県における入院・療養中等の幼児児童生徒への相談支援や学習支援の取組を進めるために、全県域の病弱教育におけるネットワークの中核的な拠点として、「病弱教育サポートセンターきらり☆（以下、サポートセンター）」を校内組織として立ち上げ、病弱教育のセンター的機能の一層の充実を図っている。

２　病弱教育サポートセンターきらり☆について

（１）担当スタッフ

サポートセンターには、病弱教育を対象とする特別支援教育アドバイザーと病弱教育コーディネーターを配置している。アドバイザーは平成２８年度から配置され、主に病院内学級や通常の学級、特別支援学級等へ在籍する幼児児童生徒への相談支援や在籍校の校内支援体制への助言、進学や復学に伴う学校間や市町村、関係機関との連携に関わる助言、担当教員への指導力向上に関する研修会等での助言を行っている。コーディネーターは平成２９年度から配置し、病院や在籍校との連絡調整、入院から復学後までの相談支援や学習支援の調整、県内の特別支援学校との連携、病弱・身体虚弱特別支援学級のネットワークづくりを行っている。ほか、入院中や退院後の自宅療養中等の児童生徒への実際の学習支援を担当する教員３名の合わせて５名のスタッフで取組を進めている。

（２）業務内容

ア　県内の病弱教育対象幼児児童生徒への支援
・病弱教育対象の児童生徒が在籍する学校、保護者、関係機関等への支援
・病弱教育対象幼児の就学に関する相談支援

イ　入院児童生徒への相談支援・学習支援
・秋田市の小児科病棟のある４つの総合病院、医療療育センター入院児童生徒への支援
・秋田大学の学生が中心となって活動する民間団体「病児学習支援ボランティア人材バンク」の学生による学習支援（民間団体との連携）

ウ　県内の病弱・身体虚弱特別支援学級とのネットワークづくり
・特別支援学級実践研修（秋田県教育委員会の事業）、設置校への訪問による情報交換

エ　市内総合病院との連携

・長期入院児の病院内訪問教育、入院幼児への幼児教室の実施

オ　研修・情報発信

・病弱教育研修会の実施、地域支援だよりや学校ホームページによる情報提供

エ　関係機関との連携・関係機関への理解啓発活動

・市町村教育委員会、高等学校への訪問や情報交換、小・中学校長会での説明

（３）開設からこれまで

サポートセンター開設を機に、病弱教育の中核的な拠点としてこれまでの取組を拡充し、周知を図るために、この２年間は全県域の市町村教育委員会や医療機関、学校等への訪問や、小学校・中学校長会での説明会、リーフレットの配布等の PR 活動を精力的に行ってきた。開設から３年目となり、『困ったときに相談できる機関』の一つとして相談や支援の依頼が増え、周知が進んできていると感じている。今後も周知を図る取組を継続していく中で、今年度は、在籍校が「自分の学校の子どもを自分たちで支援する」意識の向上、及び支援方法のサポートを進めたいと考えている。次項では、在籍校が主体となって支援を進めた昨年度の事例について述べる。

３　在籍校が主体となって入院生徒への学習支援を進めた事例

（１）入院生徒について

・中学２年生　　・両足の怪我による１ヶ月半程度の入院

（２）生徒に対する支援内容

在籍校	病弱教育サポートセンター	病院
・遠隔授業の実施 ・定期的な学習プリント等のやりとり ・学校行事動画の配信（学校祭、合唱コンクール） ・ｅライブラリーによる自主学習の勧め	・病院内訪問による学習支援 ＊在籍校や病棟との連絡調整	＊主治医から学習支援実施の許可。リハビリ等の予定はあるが、学習を優先させて計画して構わない。

（３）入院から支援開始までの流れ（※サポセン＝病弱教育サポートセンターきらり☆）

支援依頼後の日数	内　容	連携者	
		在籍校	サポセン
０日	病棟看護師から学習支援希望の入院生徒がいる旨の連絡が入る		○
２日	主治医から、入院生徒についての情報提供		○
５日	生徒、保護者との相談支援（＊遠隔授業の希望あり）		○
６日	保護者から、病弱教育サポートセンターの学習支援利用の連絡が入る	○	
	本校教頭から、在籍校教頭に学習支援実施の連絡を入れる	○	○
	病弱教育サポートセンターから在籍校担任に連絡を入れて、情報共有する	○	○
	教頭、教務主任、担任、学年主任、教科担当で、入院期間における学習支援についての打合せ	○	
７日	在籍校教務主任と病弱教育サポートセンターで、学習支援に	○	○

	ついての打合せ		
８日	遠隔授業に向けて、教務主任と ICT 支援員が打合せ	○	
９日	学習支援開始		○
１２日	遠隔授業実施に向けて、在籍校と病室の接続テスト（病室には、病弱教育サポートセンタースタッフが立ち会い）	○	○
１３日	遠隔授業開始	○	

（４）在籍校による支援の実際

ア　遠隔授業について

○週３日４時間程度　＊生徒の希望教科（数学、英語を２時間ずつ）実施
＊ＩＣＴ支援員の勤務日に実施

○学校のパソコンを使用

○Microsoft Teams の会議機能を使用

○病棟内設置の Wi-Fi を使用

○遠隔授業の様子

・教室にいる時と同様、授業の始まりと終わりの挨拶も一緒にしていた。

・ＩＣＴ支援員が、カメラの向きの調整や、ズーム等の支援をしたことで、黒板が見やすく、画面越しでもノートを取ることができていた。

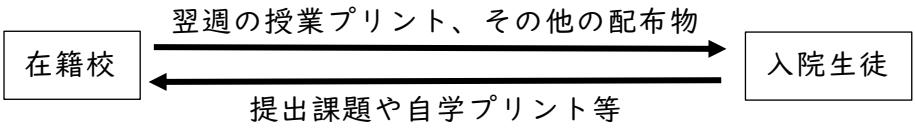
・教師が机間巡視の際に声をかけてくれたり、画面越しにプリントを確認してくれたりした。

・休み時間になると、友達が声をかけてくれて、楽しそうに話をしていた。

イ　定期的なプリント等の受け渡しについて

○週１回、担任が病棟ナースステーションを訪問

＊コロナ禍で面会制限があり、直接、顔を合わせることができなかった。



（５）病弱教育サポートセンターによる学習支援の実際

○週１回１時間程度、病院訪問による学習支援(数学中心)

○数学の学習は、在籍校の授業プリントを使用。週３時間の数学の授業のうち２時間を遠隔授業で学習し、もう１時間分を学習支援の時間で補完した。

○数学以外の教科では、自学で分からなかった問題を教科書を見ながら一緒に考えた。

（６）入院期間を終えて

○在籍校が主体となり、入院中も「遠隔授業の実施」「定期的なプリント等のやりとり」等の支援が行われたことで、入院生徒の学習の遅れに対する不安や復学に対する不安の軽減につながった。さらに、在籍校とつながっている安心感をもちながら入院生活を送ることができた。入院生徒とその保護者からの感想からも、それらのことが伝わってきた。実際、退院後に在籍校担任に連絡を入れると、数日の自宅療養後に元気に登校していると報告を受けた。

～入院生徒の感想～

○授業に遅れることなく、勉強を進めることができたので良かったです。教科担当の先生もプリントのチェックなどを画面越しにしてくれたので良かったです。

～保護者の感想～

○入院して勉強がおろそかになると思ったので大変良かった。

○学校での授業に参加できたり、友達とのコミュニケーションも図れたと思うので良かった。

4　今後の取組に向けて

（１）入院から学習支援実施までの流れ

各医療機関における入院児への支援については、小児科医師からの依頼でスタートしている（図１－①②）。次にサポートセンターが病院を訪問し、主治医、入院する児童生徒・保護者との面談を通して、学習支援の要望や入院中の不安等を聞き取る（図１－③）。昨年度まではここでサポートセンターから在籍校に連絡をして学習支援の具体的な内容を相談していたが、今年度は保護者から在籍校にサポートセンターの支援を受けることを連絡し（図１－④）、在籍校からサポートセンターに派遣を依頼する（図１－⑤）という流れで学習支援を実施している。ここから、在籍校の担任とサポートセンターとで、入院児童生徒の要望をもとに、在籍校ができる学習支援方法とサポートセンターの支援内容について具体的な相談をしながら進めている。

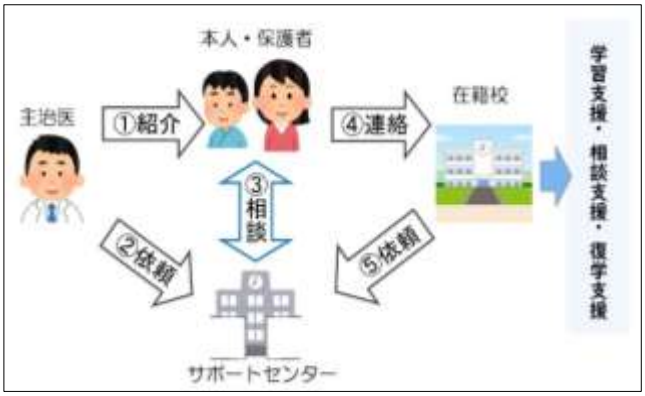


図１　入院から学習支援までの流れ

（２）入院及び自宅療養中の児童生徒への学習支援の必要性について

病気の子どもに対して「元気になってからまた一緒に勉強しようね」ではなく、「病気のときでも教育はできる」「病気のときだからこそ行う教育がある」「机に向かわなくてもできる学習方法がある」ということを啓発することが大切であると考える。本人や保護者のニーズを関係者で共有し連携を図りながら、本人が安心し意欲的に取り組める学習支援の実現を目指したい。

（３）遠隔授業に向けた支援について

小・中学校においてもタブレット端末を用いた学習が日常的に行われ、入院中も e ライブラリーを視聴しながら自主学習できるケースが増えてきた。しかし、遠隔授業となると接続やトラブル対応のため常時職員が見守る必要があり、容易に実施できるとは言えない現状である。昨年度までに遠隔授業を実施した学校では、ICT 支援員が勤務する曜日を実施日に充てていた。

入院児童生徒への学習支援の内容は様々であるが、「授業に参加してみたい」というニーズも増えている。学習支援を受けた入院児童生徒へのアンケート結果を見ると、「学習ができたことの安心感」だけでなく「心理的な安心感」があったことの記述が多い。遠隔授業により「友達の声を聞くこと」「先生や友達から話し掛けられること」等は、入院していても自分の存在を認められ、退院後の登校意欲等スムーズな復学につながると考える。病院によっては、摂食障害や病気をきっかけに不登校傾向にある小・中学生等に関わることも多く、復学に向けて自宅との遠隔授業を要望するケースもある。

テレプレゼンスロボット「kubi」

サポートセンターでは、モバイル Wi-Fi ルーターや iPad の他、テレプレゼンスロボット「kubi」、更に今年度は、アバターロボット「OriHime」の貸与を行っている。まだ活用ケースは少ないものの、児童生徒自身がカメラの位置や遠近等を遠隔操作により調整できるため、接続をサポートすれば、在籍校の負担は少なくなる。今後、学習支援の一助として、提案していきたいと考えている。

アバターロボット「OriHime」

あ　と　が　き

当たり前のようにどこの学校でも必ず行われている「研究」。では研究とは何でしょうか？何のために行うのでしょうか？いつしかそれが「やらなければならない」苦行のようになってはいないでしょうか？多忙な業務の中で取り組む意義や意味は？我々の中には常に数々の疑問が立ち上がります。

さて、本校の今年度の研究の特色は、一人一授業でした。研究の方法と一言で言っても、様々な形が考えられますが、本校ではあくまでも基本は日々の授業の質の向上と捉え、この形にしました。このスタイルのメリットは、個々が自分事としてとらえ、授業の在り方について具体的に検討する機会になることです。言うまでもなく、学習指導と学習評価は学校教育の根幹をなすものです。改めて、基本に立ち返り、足下を見直す機会となりました。

その反面、難しいのは深まりや共有化です。本校のような職員数が多い学校にとって、一人一授業を行うのは事前事後の研究会も含めると時間的にも非常に困難を伴いましたが、1 年間をかけて何とか計画的に実施することができました。授業参観の機会を確保するために、授業を iPad で録画したものを職員室に置き、各自が業務の合間に見て意見を付箋紙で出し合う工夫もし、多忙な業務の合間を縫って真剣に画面を見つめる姿が見られました。個で完結しないよう、グループごとに事前・事後の検証を丁寧に積み重ね、主体的に学ぶ子どもの姿を求め、教師自身も主体的に取り組んだ 1 年でした。

研究は、「自分ごと」と捉えて初めてその成果が生かされます。授業改善の中で、教師の手立てが変わったことで、児童生徒の表情や動きの変化が見られたという声も多々聞かれました。教師の実践の成果の指標の一つは児童生徒の変化です。日々目の前にしている子どもの成長の姿は、我々教師にとって何よりの励みになります。数字では測れない部分ではありますが、なくてはならない視点です。授業が分かりやすく楽しくなれば子どもも変わる、子どもが変われば教師も手応えを感じうれしくなり、さらに工夫したくなる。周りの教師も以前との変化に気付き、子どもの姿や指導について日常的に話題が広がる。一人の成果をみんなで共有し、他の場面や子どもにも広げていく。さらに家庭にも…等々、人と人が双方向で有機的につながり合うことで、その成果が何倍にもなる、そんな楽しい研究、うれしい研究のサイクルができること、それが答えのない学校現場における研究の究極の目的や意義であるような気がしています。そんな研究の実現と教育活動の充実に向けて、一歩一歩ではありますが、全職員で前進してまいります。

本研究紀要を御覧いただきました皆様におかれましては、ぜひ本校の研究に対し、忌憚のない御意見・御感想をいただければ幸いです。

最後に、本年度の研究推進に対し、御指導・御助言くださいました皆様に心より御礼を申し上げますとともに、今後とも御指導を賜りますようお願い申し上げます。

副校長　近藤　千晴

令和４年度　秋田県立秋田きらり支援学校　研究同人

校　長　　千葉　雅樹　　副校長　　近藤　千晴
教　頭　　近藤　　郁
教　諭（兼）教育専門監　　二階堂　悟　　島津　憲司

小学部

松岡　圭一	畑江いづみ	柴田　　法子	山本　泉子	佐藤　　昭子
田村祐貴子	大友明希子	若月　　圭	福田　純悦	栗谷川美和子
吉崎　真紀	加藤　裕美	藤原　　伸	佐々木里枝	金子　みさ子
大川里香子	原田もとよ	佐々木由美子	藤原　淳一	山内　かほる
笹渕理恵子	柏谷　明宏	髙橋　　亜紀	神居　麻恵	髙橋　絵里香
藤本　敦子	廣川　佳世	髙橋　　美咲	宇佐美尚美	鈴木　　陽
藤井　真由	新岡　航平	小柳　みなみ	猿田　晃永	栄田　　優子
北嶋　初美	田中　一彦	秋山　フサ子	田村千賀子	久慈　由起子
神部　直子	伊藤　咲子	目黒　　敦子	蔭山佐智子	諏訪　　央憲
千葉　　葵	佐々木美里	佐々木　雅子	高橋　葉月	

中学部

館山百合子	熊地　　需	平川　　裕子	久保　妃香	佐川　　祐子
藤島真砂子	柳田　栄基	佐藤　　孝史	守屋由紀子	葛西　　輝美
小野寺珠貴	戸松　伸悟	小林　　紀子	菊地真智子	一関　留美子
北條　幸恵	小島　　聖	由利　美奈子	高橋　朋子	伊藤　　陽子
簾内香緒里	佐々木理恵	熊地　　勇太	北原　桃子	大髙　梨紗子
目黒　真帆	池田　晃輝	越後　　駿	今野美貴子	

高等部

跡部　耕一	池田　　修	高橋　　聡	山中　征子	伊藤　　和樹
藤原恵理子	長谷恵美子	工藤　　裕子	佐藤　　篤	近江　　美歩
高澤衣久子	佐藤　友香	藤田　亜樹子	加藤　俊之	小林　佐知子
門間　洋平	藤原　幸子	荻原　　正賢	福田英美子	保坂　まゆみ
塩野谷あおい	伊藤　晃子	縄田屋　美幸	畑山　　拓	佐々木　恭兵
鎌田　雄太	神田　優子			

き　ら　り

令和４年度研究紀要（第１３集）

研 究 主 題

肢体不自由及び病弱教育における主体的な児童生徒を育む授業づくり

発行年月日　令和５年３月

発　行　所　秋田県立秋田きらり支援学校

〒０１０－１４０９

秋田県秋田市南ケ丘一丁目１番１号

ＴＥＬ　０１８（８８９）８５７３

ＦＡＸ　０１８（８８９）８５７５

ホームページ　http://www.kagayaki.akita-pref.ed.jp/kirari

メールアドレス　kirarisien@akita-pref.ed.jp